九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

2006年度大学院案内

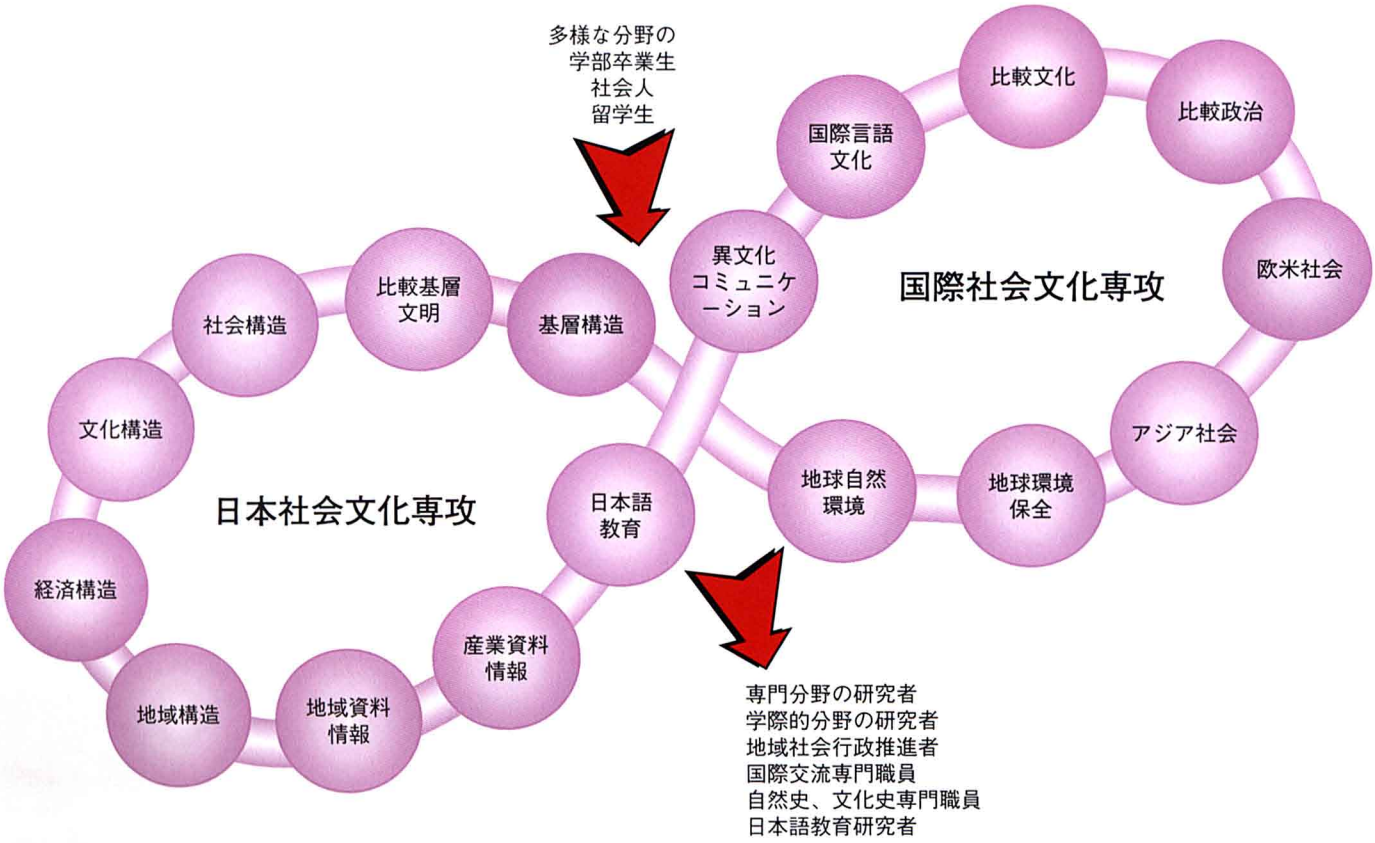
https://hdl.handle.net/2324/19172

出版情報：九州大学大学院比較社会文化学府大学院案内. 2006年度, 2006-06. 九州大学大学院比較社会文化学府
バージョン：
権利関係：

2006年大学院案内

越境する文化
共振する世界
変動する環境

九州大学大学院
比較社会文化学府



目次

比較社会文化学府の特色 …… 1
各専攻の理念 …… 2
研究教育体制の特色 …… 3
21世紀COEプログラム
「東アジアと日本：交流と変容」… 6
研究・教育プログラムについて… 8
歴史を学ぼうとする人々へ …… 8
カルチュラル・スタディーズを学ぶ人に ……10
社会学を学びたい人のために……11
政治の世界を探検しよう!−政治学分野の紹介…13
国際関係論・国際社会論のすすめ …14
言語教育学関連の研究のために …15
日本語教育研究をめざすなら……16
世界の「韓国研究」へ ……18
文化人類学を学びたい、あなたに! …19
人文地理学を究める ……20
たとえば「漫画」を研究したい人に …21
ロマン主義研究コース ……22
比文理系の研究・教育とその展望…23
考古学・人類学メニュー ……24
１ｇの人骨から古代人の生活を探る …25
地球創生期から現在まで……26
ヒマラヤとモンスーン研究グループ…27
物理・化学の目で地球環境を調べる…28
物質科学研究グループ ……29
自然史研究・生物体系学 ……30
自然保全分野 ……31
教員紹介 ……32
在籍学生数 ……48

比較社会文化学府の特色

私たちの学府は、つぎのような理念を研究・教育の柱としています。そして、その理念を実現してゆくためには、既成観念にとらわれない教員の側の努力が不可欠であることは言うまでもありませんが、学生諸氏にも、たんなる「受信者」ではなく、みずから「発信者」となって積極的に学習し研究することが期待されているのです。

1 異なる社会文化の共生を目ざした研究教育

現代世界は、国家間の関係という意味での「国際化」をこえた、グローバリゼーションの時代にあります。それは人やモノ、資本、情報などの移動と交流の飛躍的な増加や、地球環境問題の深刻化など、様々な面を合わせもつプロセスとして進行しています。それはまた、従来なかったような軋轢や文化の画一化を生み出しています。

しかし同時に、グローバリゼーションは、異なる文化伝統をもつ諸社会が互いに理解を深め、共生してゆく契機ともなりうるものです。そのような新たな状況を前にして、異質な社会に暮らし、異なる文化を生きる人々の間に、違うからこそお互いを豊かにしあうような関係を、どのようにして育ててゆくことができるのか。それを模索してゆくことが、私たちの学府の課題です。

2 学際的なアプローチ

私たちの学府の教員の専攻分野は、従来の区分で言えば、人文科学・社会科学・自然科学の多岐の分野にわたっています。そのような構成をとっている理由は、私たちの目的が学際的な研究教育にあるためにほかなりません。現代社会が直面している問題は、どれひとつをとっても、旧来の専門分野の区別をこえた複雑さと広がりをもっています。

そこで私たちの学府は、社会・文化・自然の様々な視覚から問題にせまる総合的なアプローチを研究教育の柱にすえています。そのような学際的な研究教育を実り多いものにするために、専攻を異にする複数の教員が、連携し協力することに努めていることは言うまでもありません。そして、そのようにして提供された「土壌」に、自ら問題意識という「種」を播いて、それを育てて「創造的な研究という花」を咲かせることこそが、学生諸氏に期待されているのです。

3 日本と世界を結ぶ行動人の養成

たしかな知識に裏打ちされた批判意識をもち、それと同時に、自分と異質なものに対しても、しなやかな感受性をもつ人こそ、真の国際人と言えると私たちは考えています。しかも、受信し考えるだけでなく、発信し行動する実践的な国際人がもとめられているのが現代という時代です。そのような人々を育ててゆくことを、私たちの学府はめざしています。

そのために、日本の社会文化についての研究でも、他の社会との比較という視点を失わず、外国の社会文化についての研究でも、日本との比較という視点を重視してゆきます。日本知らずの外国通でなく、日本について深く語ることができると同時に、異文化について共感的な理解ができる人間として自らを育てゆくこと。私たちは、それを学生諸氏とともにめざしてゆきたいと考えています。

4 社会に開かれた学問

大学の新卒者は、学府の入学者として私たちが思い描いている人々の一部にすぎません。既に社会に出て活躍している方々や留学生は、新卒者と同様に私たちの学府の主役です。

さらにまた、研究者の養成は大学院の重要な使命ですが、専門的研究者は、大学院を修了した人々について私たちが思い描いている姿の一部にすぎません。さまざまな職業分野での実践をとおして、大学院での研究の成果を活かす専門家。既に社会人としての体験を経たのちに大学院で研究し、その体験を元の職場にもどって活かして活躍する人々。日本での研究の成果を、自国にもどって、あるいは他の国での活動に活かしていく外国からの留学生。そのような人々も、私たちが想定している大切な学生なのです。

私たちの学府を、国籍や性や言語や社会体験などの点で異なる人々が出会い、共に生き、互いに高めあう場としてゆくこと、それが私たちの願いなのです。

各専攻の理念

〔日本社会文化専攻〕

日本は現代さまざまな問題に直面しています。それらを日本という国家の成立・発展・功罪を問いつつ、批判的に研究することは、私たちの未来を構想するために不可欠なものです。そこではまた、国家という枠組みを相対化する視座も必要になります。国家の枠組みにとらわれない生活者の歴史や、一定の自律性をもつ地域の変動過程に対する目配りが欠落すると、日本の歴史的・現代的問題の全体像をかえって見えにくくしてしまうからです。さらに現代的問題の多くが自然環境との共生に関わるものであることを考えれば、自ずと人間社会それ自体を相対化する視座も求められるでしょう。

グローバリゼーションの時代にあって、日本人が日本について深く理解することは、いっそうその重要性を増しています。しかしそれは、日本のみを対象とする研究によって得られるものではありません。海外との相互影響が日常的なものとなっている現代においては言うまでもなく、文字資料のない昔から、日本列島の文化と社会は、外との交流なしでは形成されえなかったものです。つまり日本研究においても、「世界の中の日本」という観点が不可欠なものなのです。

これらの点に注意しながら、私たちは、日常の出来事、諸制度のしくみや変遷、言語文化の変容、考古資料など、あらゆるものに「日本」を解く鍵を求めてゆく必要があります。しかし、そもそも日本人が日本について研究するというのは、どういうことなのでしょうか。逆にいえば、日本を研究するときに自分が日本人である（あるいは外国人である）ことをどう意味づけるべきなのでしょうか。こうした「客観的な知」のあり方に関わる認識論的問題を見すごすことはできません。

本学府の「日本社会文化専攻」では、以上のような問題意識を共有しつつ、既存の学問分野それぞれの長所を活かしながらも、それを越えるような学際的研究を推し進めることを目指しています。

〔国際社会文化専攻〕

現在の世界には、孤立し自足した社会は存在しません。経済・政治・文化・環境などあらゆる領域において、世界は相互に依存し影響しあうようになっています。さまざまな問題は、もはや国境の内部には留まっていませんし、その解決のためにも、国家の枠組みを越えた協力が必要になっています。世界は、ひとつのシステムを形成しつつあるのです。

しかし他方で、その同じ状況が、社会や文化の間の差異をいっそう際立たせ、ときには相互誤解を生み、暴力的衝突すら引き起こしています。つまり世界は、矛盾や支配や不平等を含んだ未完のシステムなのです。

そのような世界に生きる私たちが、よりよい未来を構想するためには、どのような研究がなされなければならないのでしょうか。第一に、「地球」という観点を重視してゆくことでしょう。地球は、私たち人間だけでなく、すべての生物の「ふるさと」なのです。第二に、社会や文化（それは国家という単位に対応するとは限りません）の間の差異が、不平等や相克性へと転化してしまうメカニズムを明らかにしてゆく研究でしょう。そうした問題意識なしで、諸社会や諸文化の共存を謳うことには意味がありません。現実に存在する多様性は、人類の貴重な遺産であると同時に、その可能性の現れでもあるのです。

差異がつねに誤解を生むのだとしたら、これほど不幸なことはありません。しかししばしば、異なる社会に暮らし、異なる文化を生き、異なる言語を話す人々の間には、誤解が生じ、差異を相克性へと変えてしまいます。そのような事態を避け、そこに実り豊かな対話を成立させるためには、コミュニケーションというもの自体についての透徹した研究が必要であることは言うまでもありません。

本学府の「国際社会文化専攻」では、以上のような問題意識を共有しつつ、既存の学問分野それぞれの長所を活かしながらも、それを越えるような学際的研究を推し進めることを目指しています。

研究教育体制の特色

1 専攻について

本学府は、「日本社会文化専攻」と「国際社会文化専攻」の二つの専攻から構成されています。学生の一人一人は、どちらかひとつの専攻を選んで出願し、入学後はその専攻に所属する学生となります。しかし、自分の所属していない専攻の演習を履修することは可能ですし、一定の範囲で他専攻（あるいは他学府）の単位を履修することが義務づけられてもいます。また念のために申し添えれば、本学府の教員は、教員の組織としての18の講座に所属していますが、学生は特定の講座に所属する学生となるわけではありません。

2 指導教員団について

学生の一人一人に対して、入学後におこなわれるオリエンテーションを経た段階で、本人の希望を最大限に生かすかたちで、本学府専任の教授・助教授・講師のなかから、３人の指導教員からなる「指導教員団」が選ばれることになります。

本学府が「指導教員団」による研究指導体制をとっている理由は、学生に対して幅広く的確な指導をしてゆくためです。学生一人一人の学問的関心・研究計画は、従来の学問分野のいずれかひとつに必ずしも納まらないことが予想されますし、学際的なアプローチを重視している本学府では、むしろそのような学生を歓迎します。しかし、修士課程２年また博士後期課程の３年という時間は限られておりますし、修士課程を修了するためには、全員に修士論文の執筆が義務づけられています。そこで従来の学問分野をこえて広く学びながらも、それを各自の問題意識に合わせて生産的に関連づける研究・履修計画が必要になります。そのような研究・履修計画の策定と実行をサポートするのが「指導教員団」です。もちろん研究をすすめてゆく上で、他の教員からも指導を受けることは可能であり、それは望ましいことでもありますが、学生各自の研究計画にそって、自ずと一定数の教員から日常的に指導を受けることになるでしょう。その核をなすものが「指導教員団」であると理解してください。

各専攻の講座編成と教員名簿

専攻	講座	教授	助教授・講師	助手
日本社会文化	社会構造	有馬　學 吉岡　斉 吉田　昌彦	杉山あかし 直野　章子	
	文化構造	松本　常彦 清水　靖久	西野　常夫 波潟　剛 施　光恒	大杉　卓三
	地域構造	高野　信治	三隅　一百 山下　潤	
	基層構造	田中　良之 中橋　孝博 岩永　省三 （総合研究博物館）	溝口　孝司 佐藤　廉也	石川　健
	地域資料情報	小山内康人 小池　裕子 服部　英雄 中野　等 矢田　脩	宮崎　克則 （総合研究博物館）	馬場　芳之
	自然保全情報（連携講座）	米田　政明 松島　昇	菰田　誠	
	経済構造	荻野　喜弘 関　源太郎	北澤　満	
	比較基層文明	宮本　一夫	辻田淳一郎	
	産業資料情報	三輪　宗弘	宮地　英敏	
	日本語教育	松村　瑞子 山村ひろみ	因　京子 小山　悟 西山　猛 松永　典子	
国際社会文化	アジア社会	森川　哲雄 清水　展 太田　好信		
	欧米社会	高田　和夫 古谷　嘉章	嶋田洋一郎 柄谷利恵子	
	比較文化	根井　豊 高橋　憲一	新島　龍美 鏑木　政彦	
	地球自然環境	嶌　洪 北　逸郎 酒井　治孝	石田　清隆 大野　正夫 荒谷　邦雄 桑原　義博	山中　寿朗 藤井　理恵
	比較政治	大河原伸夫	岡崎　晴輝	
	地球環境保全	矢幡　久	黒澤　靖	
	異文化コミュニケーション	小谷　耕二 ミヒエル ヴォルフガング 井上奈良彦	鈴木　敦典	
	国際言語文化	太田　一昭 阿尾　安泰 松原　孝俊	李　一清 秋吉　收	

3 教育と研究について

修士課程を修了するためには、一定数の単位を取得し、修士論文を提出して、その審査に合格しなければなりません。開講されている科目としては、一人の教員が担当する「演習」、多面的なテーマについて複数の教員が共同で担当する「総合演習」、調査研究の技法の指導を目的とする「調査研究方法論」、主として論文作成のための指導としての「特別研究」があります。しかし各年度に、そこで実際にどのようなテーマが扱われるか、それが実際にどのような形態で行われるかについては、画一的な形式はありません。多様な学問分野にまたがる多くの教員と多様な関心をもつ学生の相互作用のなかで、それぞれに望ましいかたちをとることになるでしょう。学際的研究教育をめざす本学府では、無用な形式合理性によって自由であるべき知性に足枷をはめたくないからです。また様々な科目をどのように組み合わせて履修してゆくかが、学生一人一人の創意工夫にまかされていることは言うまでもありません。「学際的な定食メニュー」などはないのです。

修士論文の執筆は、学生一人一人の研究計画のなかでも最も重要なものです。本学府での研究の成果のすべてが、そこに具体的なかたちをとるのだと言うことさえできます。大体のながれとしては次のようになります。まず１年目の６月中旬に「研究実施計画書」を提出します。それは、修士課程の研究をどのようなスケジュールで進めてゆくか、各自が考え、基本方針を宣言するためのものです。つぎに12月の中旬には、「修士論文計画書」を提出します。これは修士論文の具体的なテーマを定めて、どのように執筆してゆく予定であるかを明らかにしてもらうためのものです。そして２年目の12月には完成した「修士論文」を１月に提出して審査を受けることになります。一人一人が充分な研究計画をたてて、本学府の演習や設備を最大限に活用して研究し、素晴らしい論文を仕上げてくれることを、私たちは望んでいます。もちろん本学府の教員は、そのためのサポートを惜しみませんが、２年間の研究をデザインし、それを実現していく責任は、学生一人一人にあるのだということを忘れないで下さい。

また課程博士取得のための博士論文は、大学院在学中に培った深い専門性と広範な知識、そして研究者としての高い独創性や考察力を基礎に、大学院生活の総力をあげて執筆されるものです。現在ではもちろん、博士論文は研究者としての集大成ではなく、むしろ出発点と位置付けられることが多いのですが、それだけに、研究者としてのそれ以後の大きな発展を予感させるものであることが要求されます。博士論文の提出は、博士課程に２年以上在籍し、一定の単位を取得したものに認められます。博士課程３年修了時に、博士の学位を取得するための一般的な手順は次のようになります。まず３年次の７月までに論文執筆資格のための「博士論文計画書」を提出します。それは、６か月後には博士論文を完成させることができるという内容を示したものでなければなりません。そして完成した学位論文を11月末、遅くとも年末までに提出します。論文は５名の審査委員によって審査され、公開審査、教授会での審議をへて、翌年の３月に総長によって学位授与の通知が行われます。

博士後期課程の３年は、博士論文を準備する期間としては決して長いものではありません。学生一人ひとりの計画的な研究生活と、指導教員との密接な連携によって可能になるものです。

4 学府と研究院について

九州大学では大学改革の一環として、平成12年度から「研究院制度」を導入しています。「研究院制度」というのは、大学院における教育と研究の基本組織であった研究科を学生諸氏が所属する教育組織としての「学府」と教員が所属する「研究院」とに分離するものです。このことによって、従来の研究科で行われてきた教育内容やカリキュラムなどが直ちに変わるわけではありませんが、そうすることによって将来的により効果的な研究教育活動ができることをめざしています。参考までに紹介しますと、比較社会文化研究院は環境変動、社会情報、そして文化空間の3部門編成で、環境変動部門には地球変動、生物多様性、基層構造の3講座が、社会情報部門には歴史資料情報、社会変動、国際社会情報の3講座が、そして文化空間部門には文化動態、文化表象の2講座があります。この他に、㈶自然環境研究センターとの連携講座として自然保全情報講座があります。つまり、全体で3部門9講座です。教員の研究院での配置状況は表のとおりです。念のためにいいますと、教員は学府の専攻や講座とは異なるところに所属しており、学府と研究院では講座の名称も構成員も異なっています。このパンフレットは教育組織としての紹介を第一にしていますから、学府に関する記述を主としています。32頁以下の専攻・講座別の教員紹介は学府のそれによっています。

比較社会文化研究院教員名簿

部門	講座	教授	助教授	助手
環境変動	地球変動	小山内康人 北　逸郎 酒井　治孝	桑原　義博 石田　清隆 大野　正夫	山中　寿朗 藤井　理恵
	生物多様性	小池　裕子 嶌　洪 矢田　脩	荒谷　邦雄	馬場　芳之
	基層構造	田中　良之 中橋　孝博	溝口　孝司 佐藤　廉也	石川　健
	自然保全情報（連携講座）	米田　政明 松島　昇	菰田　誠	
社会情報	歴史資料情報	有馬　學 吉田　昌彦 服部　英雄 高野　信治 中野　等		
	社会変動	吉岡　斉 清水　靖久	三隅　一百 山下　潤 施　光恒	大杉　卓三
	国際社会情報	高田　和夫 森川　哲雄	杉山あかし 柄谷利恵子 松永　典子	
文化空間	文化動態	根井　豊 高橋　憲一 清水　展 古谷　嘉章	新島　龍美 鏑木　政彦	
	文化表象	松本　常彦 太田　好信	西野　常夫 嶋田洋一郎 波潟　剛 直野　章子	

21世紀 COE プログラム

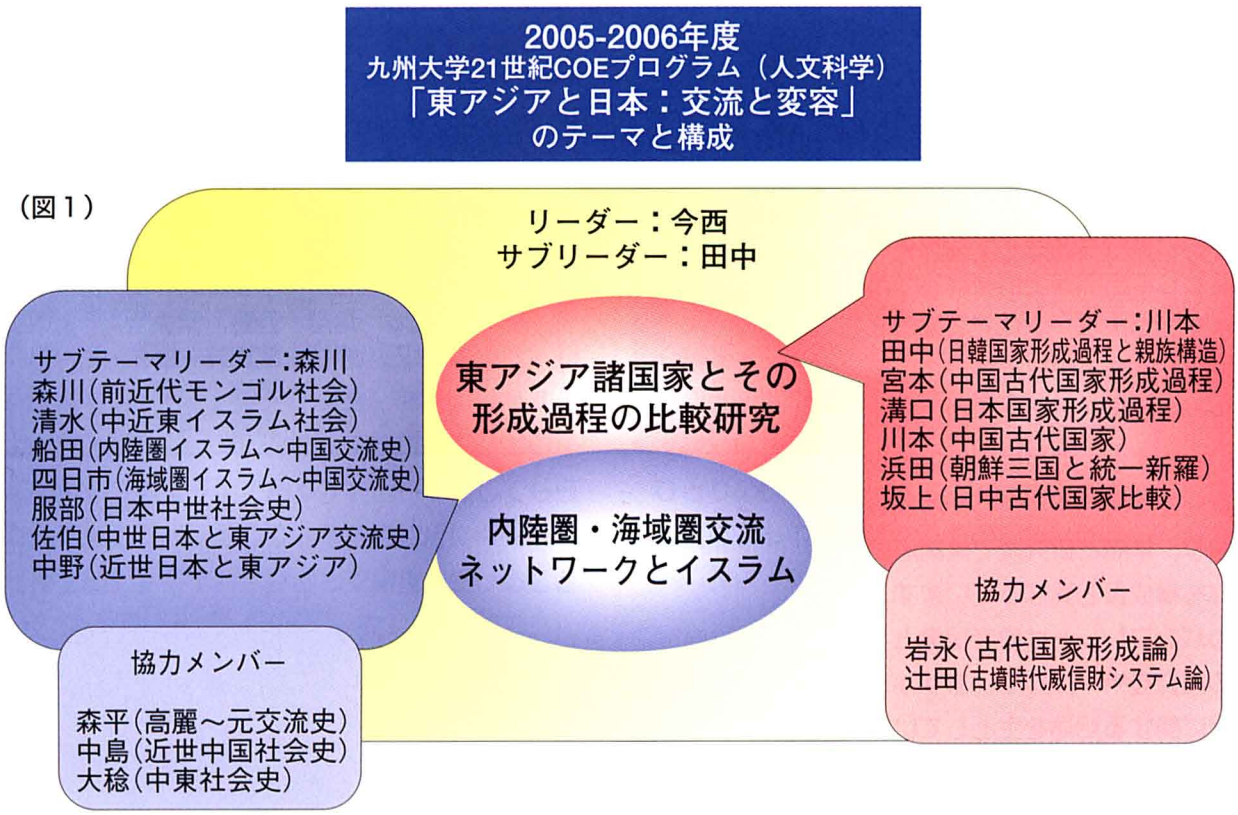
「東アジアと日本：交流と変容」

地域資料情報講座
中　野　　等

九州大学21世紀 COE プログラム（人文科学）「東アジアと日本：交流と変容」は、〈東アジア／日本〉の諸地域・社会集団を、個々の孤立・完結したアイデンティティとして捉えるのではなく、相互の交流によって不断に変容する可動態として位置づけ、その中に日本が包摂されるところの〈アジア〉あるいは〈東アジア〉とは何かというアイデンティティの問題を諸地域・諸社会集団間の「交流」と、その結果もたらされる「変容」の諸相において、解明しようとするものです。

明治以来、近代日本のアイデンティティの拠り所であった〈ヨーロッパ／アジア〉という単純な２元思考の枠組みは当然破棄され、様々な地域や社会集団は「交流」という関係式の関数として「変容」の相のもとに捉えられることになります。

本プログラムは、このような問題に、比較社会文化研究院と人文科学研究院とが共同して取り組んでいます（図１）。すなわち、両研究院に所属する日本史、東洋史、朝鮮史、イスラム史、考古学、日本語学・文学諸分野のスタッフによる学際的共同研究によって、主に歴史学的なアプローチを行うとともに、研究のみならず教育においてもアジアに隣接する地の利を最大限に生かした、九州大学独自の〈アジア学〉を開拓し、その教育体制の構築と人材の養成を目指すものです。



（図１）

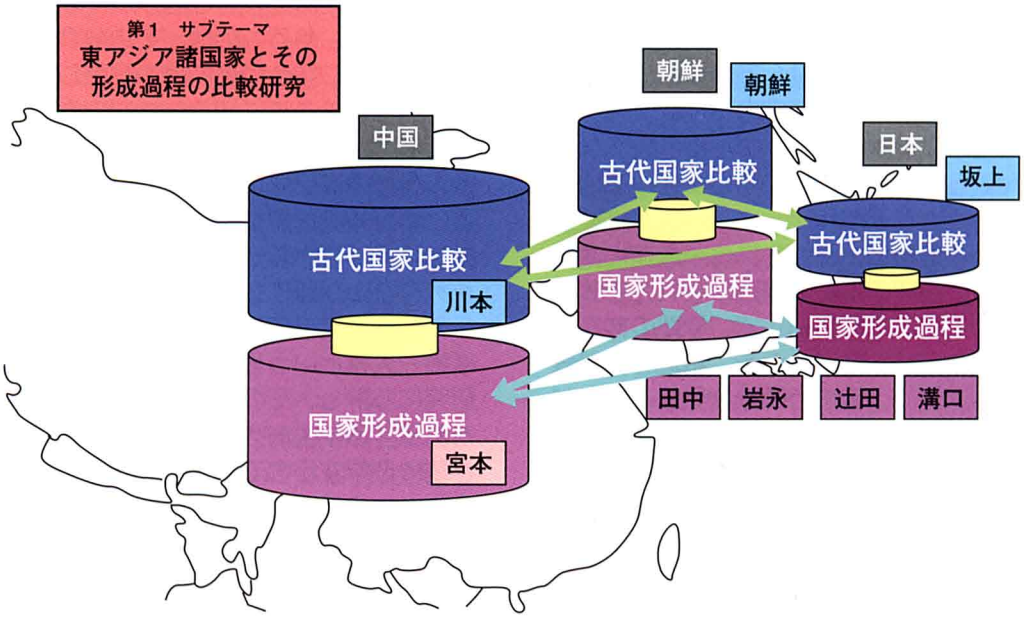
その際、特に「イスラム」を、東アジアに不可分な問題として「アジアイスラム」、すなわち「アジアの内なるイスラム」の問題にスライドさせ、「唐・本朝」的アジア認識を相対化した「比較社会史」を想定し、内陸・海域の両圏における脱国家・脱領域要素を視野に入れたアイデンティティ形成研究を目指します。具体的には次の２テーマに集約されます。

１．東アジア諸国家とその形成過程の比較研究（図２）

２．海域圏・内陸圏交流ネットワークとイスラム（図３）

また、上記の研究を国際的に推進し、世界的研究教育拠点となることを目標に、東アジア諸地域およびそれに関連する大学・研究機関との間で、「東アジア史研究コンソーシアム」の構築を計画し、精力的に交渉を進めています。

（図２）



（図３）

研究・教育プログラムについて

この学府は、専門のディシプリンから見れば、理学、農学、文学、法学、経済学などの異なる領域に広く分かれています。しかし、だからといって、あらゆる研究テーマに応じて、教育・研究指導ができるわけではありません。率直に言って、教員の側から与えられることは限られています。

理想として、私たちが考えているのは、まず学生自身が明確な問題意識をもち、それを深め研究してゆくために、みずからが従来の狭い学問区分を越え、異なる分野を結びつけながら進んでゆくことです。もちろん、研究の基礎となる特定のディシプリンをしっかりと勉強しなければならないことは言うまでもありません。しかし、そこに自閉し安住してはなりません。

グローバル化が進展し、社会も文化も急速に変化しつつある現在、研究の対象や問題の表れ方自体が変わってきています。それに応じて、学問のあり方も変わってゆかねばならないことを、私たちは自覚しています。学生諸氏の自由で柔軟な発想と思考が、新しい研究の領域とスタイルを切り開いてゆく可能性を信じています。だから、積極的で型破りと言われるような熱意をパワーのある学生を求めているのです。

そうした学生の自主性を尊重し伸ばしてゆくために、この学府では、関連する研究をしている複数の教員を学生自身が指導教員として選び、異なった視点の導入によって、多面的・総合的に研究を深めることを期待しています。そのために指導教員団という制度を導入しています。

ただし、では具体的にどのようなテーマの研究が可能なのか、教育指導が受けられるかについては、具体的なイメージを描きにくいかもしれません。そこで、このセクションでは、複数の教員が密接な連携のもとで実際に研究・教育を行っている（行おうとしている）幾つかのプログラムを紹介します。あるものは、伝統的＝保守的な大学の制度のもとでは、研究の対象とはされてこなかった新しい問題群や研究分野です。あるものは、その分野の第一線の研究者を擁して、学会の最前線を意識したものです。

もちろん、ここに紹介したプログラムは、一例に過ぎません。学生諸氏が、自分の問題意識に即して、各人各様のプログラムを作ることが可能です。むしろ、われわれが思いもつかないような教員の組み合わせによって、新しい問題の学際的な研究を進めてくれることが望ましいのです。

その一方で、この学府には、この分野の研究ならば第一人者という教員が何人もいます。その先生の研究に心酔し、その指導を受けることを求めて入学を希望する学生も大歓迎です。要は、ただ漠然と大学院に進学するのではなく、自分が何を研究したいとかという問題意識＝研究テーマを明確に持ち、この学府がその研究のためにふさわしい場であるかどうかを、よく考え、調べて、納得して入学してきてほしいのです。

そうした判断をするために、各教員の研究に関するさらに詳しい情報が、ホーム・ページ（アドレス：http://hyoka.ofc.kyushu-u.ac.jp/search/）で入手することができます。ぜひ活用してください。

歴史を学ぼうとする人々へ

「歴史の芯」を探る

「歴史」とは

歴史学は人間社会やそれと相互関係にある環境の変化を追う学問といえよう。しかし、その変化の本質をめぐり、普遍的なもの（近代化論）あるいは目指すべき未来（唯物史観）への変化・進歩という、従来いわれてきたような歴史をめぐるパラダイムの見直しが自覚されはじめている。「歴史」（の変化）とはそもそも何であるのか。我々歴史を学ぶ者が自らの努力でそれを見つけだすことが必要だろう。

その際、いくつかの観点が考えられよう。一つは変化をどのような枠組みでつかまえるのかということだ。例えば、主流的、中心的なもののみに目をうばわれるのでなく、傍流的、周縁的なものを関連づけた、全体的な把握が必要であろう。いわば複眼的かつ総合的な

枠組みである。ミクロな地殻変動（日常性）がマクロな社会変動（政治・経済問題）といかに連動するのか、あるいは中心から周縁の分離・排除がどのようなメカニズムで生じるのか。ただこのような枠組みで変化を捉えるには、傍流・周縁・ミクロな歴史の解析が不可欠でそのためにはデータ（資料）の広がりと読みの深さが要請されよう。

歴史の変化とは、先行の時代が有していた価値が後続時代の価値の強制により失われるということでもある。習俗の「矯正」や時間（暦）の統制（国家的）などはそれにあたろう。しかし、むしろ長期的時間のレンジのなかで各時代に通底する根源的・基層的なものに注目する考え方も提示されつつある。このような視覚は、人々の行動様式や意識・感情まで規制してきた歴史的な社会環境を深く探求することに通じる。同時に、いわゆる「国境」を越えて横へ拡がる可能性もある。つまり例えば近代国民国家の自由・平等というような特定階層のみに保証された価値ではなく、人類史にとってより普遍的な価値の発見にもつながるものであろう。かかる人類史的な一貫性の追求は、価値の発見に止まらず、歴史を通じ人類を悩ませるいわば永遠の問題（例えば飢えや抑圧、それに対する反発）、人間存在の諸問題を捉えることにもなろう。

「日本史」をみる視角

「日本史」の対象は、他の人文社会科学や「日本史」以外の世界史に比べ考えようによっては自明性が高いだけに、思考の枠組みが安定・パターン化しやすいと思われる。しかし、歴史認識の枠組みは大きな揺らぎの時期を抑えている。与えられた基準によってではなく、歴史を学ぶ者自ら客観性ある歴史認識の方途を探らねばならないだろう。「日本史」をフィールドにいわば「歴史の芯」（変化と一貫性に通有する核心）を、様々な角度(開発、権力、境界、村、運動、史料など）から考察する場が、ここで用意されるメニューであるが、固定的なものではなく必要に応じてフォーメーション変化もありえる。

拡げられる歴史資料学とフィールドワーク

上記の問題意識に答えるべく、本学府は他の大学院と較べてもひと味違う方法的な特色を持つ。

1　文献資料（史料）を正確に読む。
2　文献資料（史料）の行間に読む。
3　文献資料（史料）のウラを読む（史料批判）。
4　歴史資料（史料）を拡げる。
　　図像、地名、景観
5　フィールドワークへ

有馬教授の場合、近代の政治史がテーマだが、史料の読解を進める一方、政治的に活躍した人物からの聞取を積極的に行って、文献のみからは分からない多くの側面を引き出している。例えば部落解放運動のリーダーから話をきくなかで、被差別部落における生活実態など、普通の史料からは分からない興味深い事実を明らかにしてきた。

中野助教授を中心として比文の多くの歴史系教員が参加している『柳川市史』編纂事業では、大学院生が積極的なフィールドワークを行い、各村の古老から話を聞くことによって、有明海の干潟平野における生活の実態を明らかにした。その成果はまもなく大学院生によって公表される。

高野助教授は民俗学の成果をとり入れた観点から、近世の人々の生活を叙述して再評価してきた。

服部教授は福岡県教育委員会による「伊良原地域民俗調査」に大学院生とともに参加している。英彦山に抱かれ、まもなくダムに沈む伊良原地域の村の記憶を掘り起こし、記録する作業を通じて、山に生きた人々の生活がよみがえる。

地域資料情報講座では、他にも怡土庄故地、若宮庄故地、佐賀県全域の地名調査など多くのフィールド調査を継続して行っている。大学院生独自のフィールドワークの成果は『地域資料叢書』として刊行中である。97年度には東昇『村人が語る17世紀の村――岡山藩領備前国尾上村総合研究報告書――』、前原茂雄『備後国大田庄赤屋村調査報告書』の２冊を刊行した。大学院生によるフィールドワークの成果は地元新聞社にも取り上げられるなど、注目されている。

さてこうした方法上の特色を持ちつつ、本学府の各教員は現在下記のようなテーマを追求している。

比較社会史の研究

（有馬　學教授・服部英雄教授ほか関係教員）

このテーマは2002年度からはじまった21世紀 COE プログラム「東アジアと日本：交流と変容」における研究領域の一つです。人文学研究院との協同のもと、新たなアジア／日本認識の形成をコンセプトに具体的には次のような研究課題が構想されています。

・日本を含む東アジアの諸社会集団と統治体制の比較研究
・生活世界の展開と暗黙知の生成の研究
・アジア諸国家における固有法と継受法の研究
・史料の形態・様式・機能の比較研究

ところで、このプロジェクトは単に研究体制の構築を目指すものではなく、むしろ人材の育成を主眼においたものです。アジアから世界に発信しうる研究者・高度専門職業人の育成を念頭に大学院教育はますます充実した刺激的なものとなっていくでしょう。

「境界」を問い直す

（高野信治教授・中野等教授）

国民国家という概念が相対化されようとする現在、その枠組みの中で育まれてきた歴史研究もこれまでの構造や価値観を問い直すべき地平に立っていると云ってよい。すなわち、日本史研究にあっても「日本」という枠組みを前提としつつも、それを絶対視するという態度では新たな「日本史」像を描ききることも困難であろう。原始古代・中世・近世・近現代といった時代区分についても然りである。大きな時代変革のうねりを一つの「国家」的フレームに納め込み、予定調和的に論断する姿勢は退けられなければならない。また、歴史学の今日的意義を考えるとき、一つの「時代」・「社会」の動きを身分や階級といった視点から二項対立的に論じて事足れりとする訳にはいかない。国民国家がかたちづくった「境界」を取り払うことから、新たな「日本史」研究がはじまるように、ここでの「境界」はこれまでの歴史研究が前提としてきたあらゆる枠組み・構造・ファクターを象徴する。こうした既成的価値観の相対比が比較社会文化学府における歴史研究の第一歩である。

「権力」へのアプローチ

（吉田昌彦教授）

今日の日本史研究において権力というものを考えるとき、非対称型の単一権力システムというイメージが規定性を発揮しているようである。

この非対称型とは、命令者Aと受命者Bとは非対称的関係にあり命令者Aは受命者Bに対し圧倒的な力を有し、その意志をBに押し付けることが可能、というものであり、国家は一方的な命令者であるとする。この権力観は、国王が王権神授説により独自の正統性を獲得して教皇権威より独立するとともにその力を強め、それまで力を有していた貴族達ら中間的諸団体を形骸化、解体化し権力を一元化させたという西欧絶対主義王政以降の近代欧米国家の権力形態をモデルとしたものである。

この権力観は、階層の上下と社会的資源（権力、権威、富、地位など）占有の大小は対応するという社会学の通則に適合しているが、今日、フーコの規律的監視的権力論などにより相対化されている。

しかし、日本史研究、特にその前近代研究においては、なお、その呪縛から逃れ出ていないような気がする。

日本の近世においては、中間的諸団体の在地領主が中央統一権力化する一方、「古代王権」の天皇が中央統一権力者に対する正統性付与者として残置しており、非対称型の単一権力システムの基礎を作った西欧モデルと異なっているとともに社会学の通則に齟齬する部分が存在することは明らかであろう。

このため、非対称型の機械的適用ではない日本前近代の実態に適合した権力モデルの構築が必要であろう。

その際、単に「上から権力」というモデルではなく共同体などの自律性や利害のなかで派生してくる権力、それらの複数の権力を調整、統合するものとしての上部権力の在り方を検討する必要があろう。そして、かかる分析を通じて近代国民国家、「公」観念の萌芽、もしくは受容の前提の解明につながっていくであろう。

カルチュラル・スタディーズを学ぶ人に

カルチュラル・スタディーズはその名前の通り「文化」についての研究です。また、「スタディーズ」という複数形が示唆しているように、欧米だけでなく、アジア、ラテン・アメリカ、オーストラリアなどの場において、多様な形で実践され、互いに交流・影響しあい、変化しています。この新しい研究領域は、「文化」が「政治」や「経済」といった他のカテゴリーに対してどのように影響を与え、決定因子になっているのか、さらには「政治」、「経済」、「文化」といったそれぞれのカテゴリー自体が、どのような権力関係によって形成されているのかということを検証することで、既存の学問領域を組み替えていこうという学際的な試みです。

カルチュラル・スタディーズは、これまでアカデミズムの中でほとんど論じられなかった文化領域に立ち入ります。ロックや R&B などの大衆音楽、テレビや広告といったマス・メディア、さらには記念碑、証言、ロマンス小説、アニメやコンピューター・カルチャーなどがその例として挙げられるでしょう。また、フェミニズム、ゲイ・レズビアン運動や移民権利運動、反グローバリズム闘争などを含む社会運動に関わりつつ、それらを研究対象とします。

こうした領域はランダムに選ばれているわけではありません。これらはすべて、これまで自明のものとされていた「文化」の概念の再検討を要請します。国民国家、人種、エスニシティを均質な単位として前提にした文化、あるいは既存のジェンダーやセクシュアリティの枠組みに沿った男根主義的な文化、「西欧」対「非西欧」と区別される文化などを別の視点から再検討しつつ、それが権力抗争や交渉などを介しつつさまざまな矛盾をはらみながら構築されていくようすを分析しようというものです。それは、分析者が「対象」

と心地よい距離を保ちつつ行うのではなく、大学が研究・教育の場としていかなる知を（再）生産しているのか、それがレイシズム、帝国主義、（ヘテロ）セクシズムなどにどう関わっているのかを批判的・自省的に考察していこうという試みでもあります。つまり、カルチュラル・スタディーズを学ぶとは、自分自身を含む文化・政治領域への介入を行うということを余儀なくされることでもあります。

カルチュラル・スタディーズのプログラムは、複数の教員が学生の皆さんと共に作っています。社会学からは杉山あかし、直野章子、文化人類学からは太田好信、古谷嘉章、哲学からは鏑木政彦、文学からは波潟剛、松本常彦の各教員が相互連携を図りながら、歴史学、社会思想史等の領域を交えた学際的な共同研究・教育にも積極的に取り組んでいきたいと考えています。

このプログラムは大きく二つのパートに分かれます。ひとつは、基本文献とされているテクストを読むことです。ここでは、現在カルチュラル・スタディーズと総称される領域において代表的といわれる文献や、カルチュラル・スタディーズの潮流に大きな影響を与えたマルクス主義、記号論、構造主義、ポスト構造主義、フランクフルト学派などの文化理論の再読や最近のフェミニズムをめぐる論争、ポストコロニアル批評との節合も含まれます。これらのテキストは、上に挙げた７人の教員が各自開講するセミナーで取り上げられることになります。

もうひとつのパートは、カルチュラル・スタディーズの実践です。これは、「西欧のカルチュラル・スタディーズ」の理論を日本の文化的文脈に応用する、ということを意味しているのではありません。カルチュラル・スタディーズが知識の生産における西欧と非西欧の非対称性を問題にしている以上、ここで求められているのは日本国内の既存の学問領域はもちろんのこと、カルチュラル・スタディーズを含む西欧の人文科学全体を批判的に捉え、具体的にどのように干渉していくのかということになります。これは、院生のみなさんが、各自取り組んでいく修士・博士論文のプロジェクトを通して実践していくことになります。

社会学を学びたい人のために

1．本学府における「社会学」

本学府では研究対象・方法・立場、それぞれに異なるメンバーが社会学分野に関わる研究・教育活動を行っています。各人の研究を列挙すれば、次のようになります。

◎**吉岡　斉（教授）**：科学技術開発政策、特に原子力政策の問題を制度論的な方向から厳しく批判していく研究を中心に、社会における科学のあり方について広範に研究を展開中。最近はさらに医療について造詣を深めている。

◎**三隅一百（助教授）**：様々な社会事象を数理モデルとして分析する数理社会学、社会の実態を統計調査によって解き明かす実証研究、そして地域社会の問題と取り組む都市社会学といった分野の研究を精力的に推進中。

◎**杉山あかし（助教授）**：情報化、メディア、ネットワーク、大衆文化といった問題についての批判社会学的研究、マス・コミュニケーション効果論、そして社会進化論についての批判的検討を中心とする社会理論、といったものと格闘中。

◎**直野章子（助教授）**：カルチュラル・スタディーズ、フェミニズム。

以上のように多様な課題をそれぞれが自由に追求しているところが本学府の特色です。

この多様性はゼミの開講についても反映されています。本学府では教授・助教授各人がそれぞれ個人でゼミを開講しているのと共に、複数教員によって運営される総合演習というものが開講されていますが、社会学と関わりのある総合演習は一つではありません。

制度論的な議論が中心の吉岡は社会構造論総合演習に主に参加し、歴史学の教員と共に活動しております。

他方、三隅と杉山、直野は、共同で社会学総合演習を実施しております。ここではオーソドックスな社会学分野については主に三隅が、葛藤理論や文化的再生産論、イデオロギー論、あるいは現象学的社会学やアイデンティティー論といったクリティカルな社会学分野については主に杉山が議論し、直野はカルチュラル・スタディーズとフェミニズムについて議論しております。

2．学生は何を、どうやって学ぶことができるのか

学生は吉岡・三隅・杉山・直野がそれぞれ開講するゼミと、総合演習において社会学関係の教育訓練を受けることができます。また、研究課題に応じて社会学分野以外のゼミにも出席することになります。

本学府では指導教員団制度をとっていますので、指導教員は３人程度いることになります。全員を社会学系の教員とすることもできれば、関係の深い隣接分野の教員に加わってもらうこともできます。

調査研究方法論については、三隅・杉山・直野は文

化人類学の教員と共同で社会調査方法論演習を開講しており、アンケート調査、内容分析、フィールドワークなどについて学ぶことができます。このゼミの他にもいくつか社会調査士制度に対応した科目を開講していますので、本学府で専門社会調査士資格を取得することができます。（ただし学部で社会調査士を取得していない場合は、同時にいくつかの学部科目を履修する必要があります。）

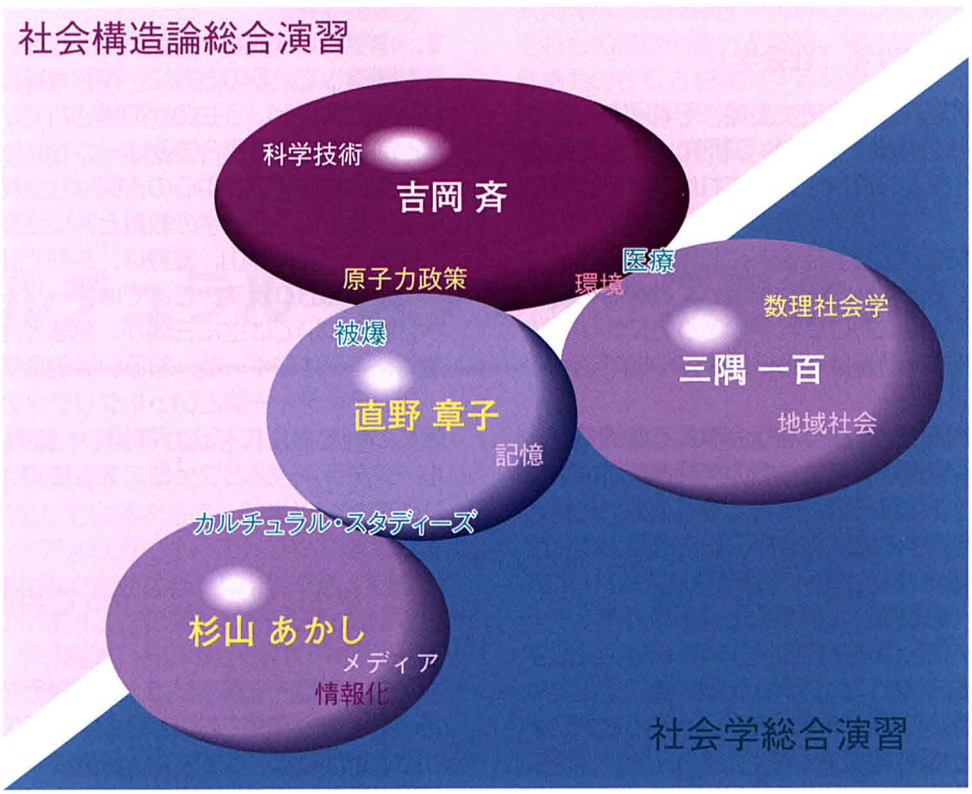
修士論文・博士論文の作成にあたっては個別に個人指導を受ける事になります。

3．最後に――社会学総合演習のことなど

学際的な研究は既存のディシプリンを無視して成立することはできません。むしろ学際を目指せばこそ、よりしっかりした足場を持ちたいものです。そうした足場として社会学を志したい諸君は、ぜひ「社会学総合演習」に参加し、社会学の理論と方法論に磨きをかけてください。「社会学総合演習」では、文献講読や研究発表を通して社会学の基礎固めを行っています。しかしこのゼミの本来の目的は、社会学を志す教員・院生が集い、互いに対等な立場で議論し切磋琢磨することです。したがってこのゼミから何が得られるかは、皆さんの日頃の努力と積極的な議論への参加にかかっています。

「社会学総合演習」以外にも社会学関連のスタッフが個別に開講しているゼミがあります。また正規の科目とは別に、社会学を深めるチャンスがいろいろあります。例えば箱崎キャンパスや近辺の諸大学の先生方・院生諸君と一緒に定期的に開催している「社会学合同ゼミ」、九大出身者を中心とした「社会分析学会」の定例大会、数理・計量に関心のある研究者が集う「数理社会学フォーラム」等々。もちろん目標は世界としても、まずはこれらの研究会やネットワークを活用して、貪欲に自らの社会学を展開されることを希望します。

比較社会文化学府における社会学研究マッピング



政治の世界を探検しよう！――政治学分野の紹介

政治学は、研究者の数だけ定義があると言われるほど、規定がむずかしい学問です。しかし、大まかに述べて、国家・統治行為・政治権力をめぐる理念、思想、歴史、人々の行動様式、文化などを研究する学問分野だと述べることができるでしょう。

本学府では、政治学を幅広く学ぶことができます。政治理論、政治思想、日本政治、国際関係論などの各分野です。思想や理論といった基礎的研究、および実際的関心に沿った問題解決的研究の双方が可能です。（国際関係論については別項に、より詳しい説明がありますのでそちらもご覧下さい。）

○各教員の研究や授業の主題

各教員の研究関心、および担当している演習の今年度のテーマは次のようなものです。

大河原伸夫：

「政治」は私たちの思考枠組みと密接に関連しています。私たちの思考枠組みに検討を加え、現在の「政治」を批判的に考察することを課題としています。特に「力」や集合的な行動主体に焦点をあてています。授業では以上を踏まえつつ、受講者の必要に応じて、テキストを読むこともあり受講者が研究報告・書評を行うこともあります。

清水靖久：

日本政治思想史を研究しています。これまで主として20世紀初頭の民主主義や社会主義や平和主義の思想を調べてきましたが、これからは広く20世紀を通して、さまざまな政治思想を研究したいと思います。2005年度の演習では、日本の社会科学の歴史のなかで第二次世界大戦後の日本の政治学を再検討することを試みています。

鏑木政彦：

専攻は政治思想史、ドイツ思想史。19世紀後半から20世紀初頭にかけての思想的転換のもつ政治思想的意義の究明を課題としています。最近は、思想史的背景を踏まえた社会科学の成立史に興味があります。大学院ゼミでは、近現代の思想史や社会科学の古典を読むようにしています。

岡﨑晴輝：

政治理論専攻。市民自治の政治理論を構築することを模索しています。比文の演習では、主要な政治理論を把握できるように、キムリッカ『現代政治理論』を読むことにしています。私のホームページ（http://www1.ocn.ne.jp/~aktiv/）がありますので、ご笑覧ください。

施光恒：

政治理論、政治哲学。特に、現代リベラリズム論、人権論。最近は主に、リベラルな国家における文化やナショナリティやエスニシティの適切な位置づけのあり方に関し、研究を進めています。大学院の演習では、「人権理念と文化」、「ナショナリズムとコスモポリタニズム」などのテーマの下、議論しています。

高田和夫：

国際関係論や平和研究、ナショナリズム研究、ロシアの近代史と革命史研究などを通して、広くいえば「近代」が生み出したものが人間存在にとりいかなる作用を及ぼしたのかについて、なるべく広く考察することに現在もっとも関心をいだいています。

柄谷利恵子：

国際関係論専攻。人の国際的移動の研究を通して、国際社会、国家、市民権の変容について考えています。大学院の演習では国際関係理論を含め、特に「市民社会」、「人権」、「移民・難民」、「民主主義」などのテーマを取り上げています。

○総合演習、論文指導、研究会について

各教員が上記で言及している個別に担当する演習とは別に、複数の教員で担当する「総合演習」があります。政治学関係のものとしては、大河原・岡﨑の担当する比較政治の総合演習、高田・柄谷の担当する国際関係論の総合演習、および清水・施の担当する「リベラリズムと福岡・日本・東アジア」（http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/ho-shiso/liberal.html）と銘打ったものの三つが開講されています。それぞれの時間では、主に、受講の院生が研究発表を行い、皆でそれについて議論するというかたちをとっています。

論文指導に関してですが、本学府では、個々の院生ごとに、複数（３人程度）の教員で「指導教員団」を組織し指導するという体制をとっています。各院生が、自身の研究テーマに応じて、教員を選び、指導教員団を組織することができます。その際に、全員を上記の７人のうちから選んでもかまいませんし、歴史学、社会学、文学などの他の関連分野の教員を選び、指導教員団を組織することももちろん可能です。既存の学問分野にとらわれない学際性を特色のひとつとする本学府ですから、学際的指導教員団を組織することは大いに歓迎されます。

最近の院生の論文のテーマをいくつか挙げてみますと、「日本の地方自治と民主主義」、「明六雑誌にみられる自由観」、「19世紀イギリス思想――ジョン・ラスキンを中心に」、「コスモポリタニズムの可能性と問題点」、「中国のフェミニズム思想」、「第一次大戦期の日露関係史」、「域内避難民を考える：モザンビークとIDP 保護」など、多岐に渡っています。

本学府の正規の授業ではないですが、研究を深め、学術的報告の技量を洗練し、人的ネットワークを広げる場として本学府の政治学関係の多くの院生が利用しているものに、学内外の研究会があります。主なものとして、法学府の政治学関係の教員や院生が多く参加する「九州大学政治研究会」や、九州大学だけでなく福岡大学などの近隣の大学の政治思想関係の教員や院生が集う「思想史研究会（九州北部）」、1985年以来20年間に渡り月例会を開いている「ソ連・東欧史研究会」（事務局・西南学院大）などが挙げられます。

以上のように、本学府では、さまざまな教員や他の院生との出会いを通じて、また多様な機会を利用して、政治学を幅広く学ぶことが可能です。意欲ある皆さんの入学を一同、心より期待しています。

国際関係論・国際社会論のすすめ

【国家間関係から多層的国際関係へ】

とくに近年、国際関係は現象として広大な拡がりと人々の日常生活にまでおよぶ深みをそなえてきた。国際関係を国家間の関係としてのみ取り扱う時代はすでに遠く過ぎ去ってしまった。しかも現代の国家は問題解決能力を低下させて、その「欠陥ぶり」が目立ち、地球的問題群、世界経済、安全保障のあり方など私たちを取り巻く国際環境は一国の政府の存在自体に非常な試練を課している。その一方で、非国家的行為主体の活動が華々しくなっている。各種のNGOをはじめとして、多国籍企業や国際機構、そして一人ひとりの市民が国境を越えて交流し相互に影響を与えながら、いわば「超国家間関係(trans-national relations)」を創り出している。なかでも、「地域」は特徴的な位置に占めて国家と国際社会全体をつなぐ媒介項としてその重要性を高めている。したがって、いま求められているのは、これら多様な行為主体の行動をトータルに把握する多層的な国際関係論であるが、「超国家間関係」を「国際社会論」として取り扱うこともひとつの試みであろう。

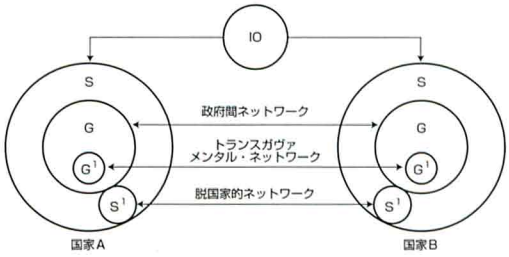
【学際性と地域研究】

このように対象とする現象は限りなく複雑に絡み合い多方面に入り込んでいるから、当然、その本質を把握しようとすれば、国際関係論や国際社会論は専門的諸科学を総合的に組織して活用しなくてはならない。そこではひとつのディシプリンに固執することはかえって有害ですらあり、方法論において学際性を追求することは大切であろう。広領域におよぶ現象分析には、旧来のパラダイムにとらわれない柔軟な頭脳が求められる。しかし、われわれは単なる理論的仮説の組み立てごっこに満足するわけでは決してない。対象に肉薄するためには地域研究をともなう実態の調査・研究が不可欠であり、思い込みや理想論の一方的強調や理論倒れに陥りやすいこの分野ではとくにそれが求められるであろう。ここでいう地域研究は対象の歴史、政治、経済、社会などを具体的に究明しようとするものであって、フィールド・ワークをともなうことが多いのである。

【欧米近現代と私たちの課題】

この学府では欧米社会講座に属する、高田和夫、柄谷利恵子の二人がこの分野の研究教育を担当している。私たちは欧米近現代の歩みが上のような地球環境を生みだす原動力のひとつであったとみて、その動きを絶対視することなくなるべく相対化して理解したいと考えている。現在は具体的にはつぎのような課題を追究したいと思っている。私たちと一緒にこの大変に興味深い世界に分け入ってみませんか。どうぞ遠慮なく、関心のある方は私たちに連絡をしてください。

国際ネットワーク
超国家的ネットワーク

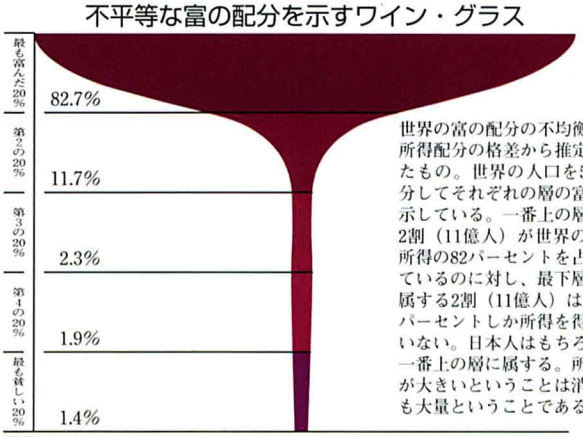


IO=国際機構　G=政　府　G¹=政府機関　S=社　会　S¹=社会内集団
出所）Hocking, B. & M. Smith, *World Politics*, 1990, p.77.

①欧米近現代の歴史、政治、経済、社会、対外関係等。とくに近代史の文脈における国民国家論の再検討
②国際関係基礎概念の見直し（国家主権、ナショナリズム、パワー、安全保障等）
③国際関係概念の拡張（人権、女性・黒人・先住民、マイノリティ、開発と環境等）
④国際関係における「地域」の再発見（地域主義、地域統合、地域協力、EU、ASEAN等）
⑤国際関係における行為主体の性格づけ（市民と市民権、ヒトの国際移動、多国籍企業論、国際機構論、文化摩擦等）
⑥平和研究との連携

【連絡先】
高田和夫
TEL＝fax　092－726－4626.
E-mail　takada@rc.kyushu-u.ac.jp
柄谷利恵子
TEL＝fax　092－726－4709.
E-mail　karatani@rc.kyushu-u.ac.jp

不平等な富の配分を示すワイン・グラス



UNDP 1992

言語教育学関連の研究のために

――外国語教育、コミュニケーション技術、等等

九州大学では外国語教育を専門に学べる大学院はないのですか？日本語教育講座はあるけれども、英語教育講座は見当たりません？さらに他の言語は？

プレゼンテーションとかディベートとか、コミュニケーション技術の訓練に関心が集まっているけれども、九州大学では研究していないのでしょうか。

そういった実践研究に関心がある人々に対して、比較社会文化学府（比文）は対応します。九州大学にはさまざまな事情から外国語教育を専門とする大学院は独立して存在せず、比文の中にも講座としては日本語教育講座しかありません。しかし、英語教育も、ドイツ語教育も、フランス語教育も、中国語教育も、韓国語教育も、外国語教育学も、第二言語習得論も研究することができます。また、プレゼンテーションやディベートのようなコミュニケーション技術教育について研究することもできます。

体系的なカリキュラムは提供できませんが、あなたに強い意欲と意志があれば、比較社会文化学府を担当する多数の関連分野の教員の授業科目を受講し、あなた自身の問題意識をぶつけて研究相談をしてください。言語教育を専門と称する大学院に負けないあなた自身のプログラムを作ることができます。教員が敷いたレールに乗って勉強し、与えられたテーマで論文を書いて大学院を修了するという安易な道ではありません。授業科目がカバーしていないところは自分で読書をし、指導教員と「格闘」して自分の論文の計画を立てないといけないかもしれません。苦労した後の成果は大きいはずです。

また、言語関係の多くの教員が九州大学の全学教育や留学生センターにおいて、実際に言語を教えています。あなた自身もTA（ティーチング・アシスタント）として実際の言語教育の現場を体験することもできます。たとえばそのような仕事を通して、大学院を担当していないけれども言語教育関係を専門とするさらに多くの教員と話をすることができます。間接的な指導を受けることもできるでしょう。

外国語教育学やコミュニケーション技術の研究は数多くの分野から方法論や理論を援用して研究が行われる学際的な分野です。下記に挙げた教員が専門とする言語学、コミュニケーション学、文学（アジアや欧米の言語文化）などの関連学問分野だけではなく、さらに比文に専門家を擁するさまざまな分野（社会学、文化人類学、国際関係論など）からの研究の支援を得ることもあるでしょう。多様な研究分野に触れることによって、外国語教育やコミュニケーション技術に関する実践的な問題意識から大学院での研究課題としてまとめる手がかりができます。

以下に学府担当の関係教員を50音順で列挙しておきます。この「豊富な資源」（さらには学府外の資源）を活用してあなた自身の言語教育学プログラムを目指してみてください。

（氏名の後の括弧内は、（所属講座：関連研究分野：全学教育での担当言語科目等）を示しています。詳細は「九州大学研究者情報」等を見てください。）

- ▶ 阿尾安泰（国際言：フランス思想：フランス語）
- ▶ 秋吉　收（国際言：中国近代文学：中国語）
- ▶ 李　一清（国際言：国際社会開発：韓国語）
- ▶ 井上奈良彦（異文化：コミュニケーション学、外国語教育学：英語・ディベート）
- ▶ 太田一昭（国際言：英文学・シェイクスピア研究：英語）
- ▶ 小谷耕二（異文化：米文学・多文化主義：英語）
- ▶ 小山　悟（日本語：第二言語習得論：日本語）
- ▶ 鈴木敦典（異文化：コンピューター利用教育：ドイツ語）
- ▶ 因　京子（日本語：語用論、意味論、日本語教育方法学：日本語）
- ▶ 西山　猛（日本語：日中語対照研究：中国語）
- ▶ 松永典子（日本語：言語政策、異文化コミュニケーション、教育史：多文化共生）
- ▶ 松原孝俊（国際言：朝鮮語教授法：日韓文化交流史）
- ▶ 松村瑞子（日本語：社会言語学：英語）
- ▶ W．ミヒェル（異文化：文化交流史における異文化理解・語学：ドイツ語）
- ▶ 山村ひろみ（日本語：スペイン語学、記述言語学、対照言語学：スペイン語）

このような言語教育関係の成果は比文のWebサイトで過去の修士論文・博士論文の題目を見てもらってもわかるでしょう。また、九州大学の「比較社会文化叢書」、「言語文化叢書」として公開したものの一部を挙げておきます。

- 『ヨーロッパの学校における外国語教育』（*Foreign Language Teaching in Schools in Europe* の日本語訳）（言語文化叢書Ⅱ）
- 『国際化時代の大学英語教育―現状の足枷と新たな可能性』（言語文化叢書ⅩⅥ）
- 『議論法―探求と弁論』（*Argumentation: Inquiry & Advocacy* の日本語訳）（比較社会文化叢書Ⅲ）

修士課程を受験希望する方は、専門科目の選択に悩むかもしれません。自身の研究課題やこれまでの学習分野を考慮して、⑰日本語学、⑱西欧言語文化、⑲アジア言語文化、⑳言語学・言語コミュニケーション　の中から選択することを勧めます。

日本語教育研究をめざすなら

—社会・文化・言語・教育・コミュニケーションの視点から—

〈学際的研究分野としての魅力〉

日本語教育研究の魅力とは何でしょうか。一言で言えば、それは「学際的研究分野としての魅力」と言えるのではないでしょうか。日本語教育関連の研究者には、必ずしも「日本語教師」としての道しか開かれていないわけではありません。社会的な要請から考えても、今後その活躍の場が広がりを見せていくことは確実です。

たとえば、2000年３月に文化庁から出された「日本語教育のための教員養成について」では、今後日本語教育の分野に求められる新しいニーズが提起されています。

1　国内外の学校教育における日本語教育に対するニーズへの対応
2　学校教育における国語教育、外国語教育を包含した言語教育構想の推進
3　国際交流・異文化間接触に関わる異文化間心理学や対人コミュニケーションを中心とするコミュニケーション教育構想の推進

すなわち、「日本語教育」分野は、１）日本語ネイティブだけでなく、日本語ノンネイティブの日本語教師の養成、地域社会・学校教育における日本語コーディネーターの養成等にも寄与していくべきであると言えるでしょう。また、２）日本語教育は国語教育や英語教育、中国語教育、韓国語教育といった言語教育全般との連携や研究交流に貢献していくことが求められています。さらに、３）日本語教育の視点からの異文化間コミュニケーション教育・国際理解教育のあり方を探求していくことも大きな課題と言えます。

そういった大きな枠組みから日本語教育を捉えた場合、教育・言語・文化に関わる基礎的研究領域のみならず、新たな学際的研究領域の創出が重要性を帯びてきます。たとえば、「コミュニケーション」を核とする**「日本語教師養成において必要とされる教育内容」**の５つの区分とその内容から、いくつかのキーワードを拾ってみることにしましょう。

区　分	内　　容
社会・文化・地域	国際関係、日本事情、移民・難民政策、外国人児童生徒、日本語教育史、言語政策、世界各地域／日本各地域の日本語教育事情
言語と社会	社会言語学、ジェンダー差・世代差、待遇・ポライトネス、コミュニケーション・ストラテジー、言語・非言語行動、異文化受容・適応
言語と心理	談話理解、視点、習得過程（第一言語・第二言語）、学習過程、学習ストラテジー、異文化間心理学
言語と教育	教育実習、教材分析・開発、異文化間教育、国際理解教育、コミュニケーション教育、言語間対照、メディア・リテラシー
言語	形態・語彙体系、語用論的規範、社会文化能力、対人関係能力

（参照　http://www.bunka.go.jp/1kokugo/）

ここにあげたものは、日本語教育分野の含む内容のほんの一端にすぎません。それだけ、日本語教育の関連分野は、新たな研究領域を開く可能性に満ちた分野と言えます。本学府で学び・研究する中から、さらに新たなテーマを探求していってみてください。

現在、卒業生の多くは国内外の大学をはじめとする日本語教育関係の職場で活躍しています。今後、新たな活躍の場を創り出していくのは、学府が求める人材である「発信者」としてのあなた自身です。

〈各教員の研究テーマ・問題関心とゼミのテーマ〉

松村瑞子（まつむら・よしこ）教授

社会言語学、対照言語学、特に意味・語用論を中心に研究を行っています。具体的には様々の言語事象に対して意味・語用論的な説明を与える研究、更に日本語と他言語の丁寧戦略の相違や男女差を社会言語学的な観点から分析しています。言語教育に役立つ言語学を目指しています。

山村ひろみ（やまむら・ひろみ）教授

専門はスペイン語学。最近は、対象をスペイン語

と系統を同じくする言語のみならず、日本語を始めとする系統も類型も異なる言語までに広げ、特に、言語と「時」の関係を人間の認知のあり方という観点から考察しています。担当の「日本語言語学」では、日本語に特徴的な言語現象を取り上げ、それを体系的に説明するにはどのような観点・枠組みが必要かを考えています。

因　京子（ちなみ・きょうこ）助教授

関心分野は、１）日本語の語用論的特徴の研究とその教育方法、２）学術目的の日本語教育の方法です。前者については、マンガ・小説など文学的作品を利用した発話の意味生成機序の解明及び教材開発を行なっています。後者については、特にアカデミック・ライティングの指導方法について研究と教材開発を行なっています。

小山　悟（こやま・さとる）助教授

日本語を「どう教えるか」を考えるためには、まず学習者が「いかに学んでいるか」を知らなければなりません。私のゼミでは、第二言語習得論の観点から学習者が日本語を習得していくプロセスとそのメカニズムについて学び、習得理論の教育現場への応用を考えています。経験論や常識論に頼らない日本語教育論の確立、それがこのゼミの大きなテーマです。

西山　猛（にしやま・たけし）助教授

日本語と中国語の対照研究、特に指示詞・人称代名詞について研究を行っています。日本語対照言語学では日本語と中国語の対照に関するテーマを扱っています。研究調査方法論ではそれぞれのテーマに従って、例えば日本語と中国語の受け身文などの研究指導を行っています。

松永典子（まつなが・のりこ）助教授

教育には教師と学習者の相互理解・信頼関係の構築が不可欠だと考える観点から、異文化間接触、異文化間コミュニケーションの視点を教育研究の中心に据えています。ゼミでは、「文化」を軸に、言語教育における異文化接触・異文化間コミュニケーションの諸問題を検討し、併せて、言語教育の実践に生かせるコミュニケーション上の方策を探っています。

〈総合演習〉

○**日本語学**：日本語言語学の基礎を学び、それを日本語教育に応用するにはどうすればよいかについて考えています。前期は日本語音声学・音韻論、後期は日本語統語論・意味論の中で、学習者にとって取り分け問題となる日本語の特徴を中心に、その指導法を考察していっています。

○**日本語教育学**：日本語教育の専門家として教育環境や学習条件の違いに柔軟に対応できるよう、前期は外国語教育の基礎理論について学び、後期は実習を行っています。前期の講義で取り上げるテーマは、大きく以下の４つに分類できます。⑴教授法理論の変遷、⑵認知的な側面から見た４技能と語彙の学習、⑶言語学習に関わる学習者の個人的要因、⑷タスクのデザインと授業の実際。

〈学生の研究動向〉

対照言語学・社会言語学視点からの研究、教育方法論の研究、文法研究、習得研究（日本語の文法・語彙の習得、言語技能の習得）、インターアクション研究、異文化間コミュニケーション研究などを行っています。

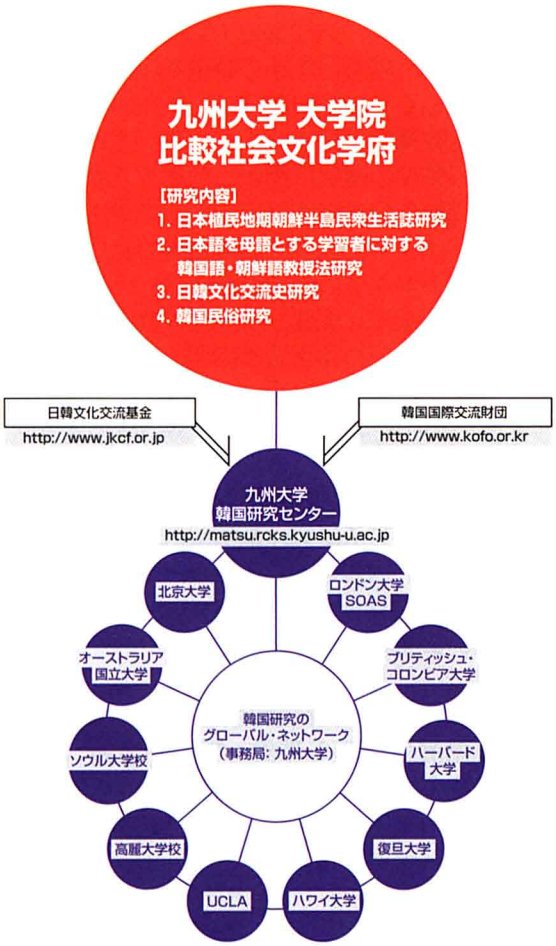
〈関連する学会・研究会案内〉

日本語教育講座の教員、学生が所属している学会・研究会には以下のようなものがあります。博士後期課程の学生を中心に、学生も活発に発表を行っています（順不同）。

「日本語教育学会」（cf.「九州日本語連絡協議会」）「社会言語科学会」「日本語学会」「日本中国語学会」「第二言語習得研究会」「異文化間教育学会」「多文化関係学会」「専門日本語教育学会」「日本語ジェンダー学会」「日本語文法学会」「日本イスパニヤ学会」「日本フランス語学会」「日本ロマンス語学会」「韓日言語文化研究会」「韓日言語文化フォーラム」「アカデミック・ジャパニーズ研究会」など。

世界の「韓国研究」へ

韓国研究への誘い



九州大学大学院には、人文科学府・人間環境学府・経済学府や法学府などでも朝鮮研究の優れた研究成果が生まれていますが、我が国際文化専攻国際言語文化講座アジア言語文化コースでは、2002年度に開設された九州大学韓国研究センターと有機的な連携体制を取りながら、韓国学の次世代研究者の養成に努めています。さらに2005年度には、九州大学韓国研究センターが事務局となって、UCLA やソウル大学校など世界の12大学で構成された韓国研究コンソーシアムが締結されましたので、今後は世界の韓国学の碩学が講師を務める大学院生対象国際ワークショップなどを通して、次世代研究者養成プログラムが実施されます。したがって九州大学大学院に在籍することで、世界の主要大学韓国研究者との間で学術研究の輪が広がるはずです。

【連絡先】
松原孝俊
koreauok@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp
http://matsu.rcks.kyushu-u.ac.jp/

1	韓国国際交流財団大学院生対象奨学金の受給者数	1999年度から2003年度の５年間：毎年８名ずつ 2005年度：５名（博士課程：１万ドル、修士課程：7000ドル）
2	韓国への留学数	2002年度：１名／2003年度：１名／2004年度：２名

文化人類学を学びたい、あなたに！

担当教員：太田好信、古谷嘉章

I

文化人類学には興味はあるけれども、その内容がよく分からず、躊躇している方々、わたしたち教員も、「文化人類学とはどのような学問ですか」と問われて、返答に窮したという経験は数多くあります。その歴史を説明すれば、十分だろうか。その方法論を述べることが先だろうか。そもそも、この問いへの答えは、人類学者たちの数だけ多様なのだろうか。けれども、いっけん本質を突くかのようなこの疑問は、この学問の性質とは相反するため、答えようのない問いなのかもしれません。興味のある方は本学府ならびに、九州大学の他学府の教員が執筆に加わった『メイキング文化人類学』（世界思想社、2005）をご覧ください。解答への手がかりくらいは、発見できるはずです。

さて、本学府における文化人類学教育の特徴は、「文化人類学とは何か」という根源的疑問について考えることを忘れずに、この学問の歴史を学び、それを継承し実践するということです。歴史が重要なのは、知識生産のための方法論しか問題にされなくなる現在、学問のルーティン化に抵抗するためです。たとえば、異文化理解としての人類学、フィールドワークの学問としての人類学、周縁化されてきた民族を援助するための基礎知識を提供する人類学、というこの学問に対する一連のイメージ群があります。本学府の文化人類学教育の目標に照らし合わせると、それらのうちひとつだけ正しいものを選択するのではなく、それらが生まれ流通し始めた時代における可能性を現在に生かすためには、それぞれのイメージをどう再解釈する必要があるのか、を再帰的に考察することになります。このような再帰的考察を、個人の研究プロジェクトに組み込むということです。

文化人類学のイメージが多様なため、つかみどころのない学問という印象を与えるのは、その対象テーマの多様さにひとつ原因があるのかもしれません。タイ北部地域の霊媒たちの活動、フィリピン労働者の世界規模での移動、ルワンダ難民たちの歴史、宝塚歌劇団とジェンダー・イデオロギー、先住民の活動と環境保全運動の関係など。論理的には、ここでそれらをすべてまとめているのが、文化人類学の本質であり、それを知れば、上の疑問には答えることができるはずです。けれども、いまだにそれに成功したという文化人類学者はいないようです。そもそも、本質は変化するものです。

とらえどころにない本質をもつ学問ですから、境界は異物を排斥するためにあるのではなく、境界は越境するためにあります。文化人類学は、異なった学問領域の歴史や問題系を尊重すると同時に、それらと対話しようとする姿勢を保持しています。（簡単にいえば、この学問は学際的なのです。これは論理矛盾ではありません。）

これまでのバックグランドが文化人類学ではなくとも、広く人文系学問の素養――たとえば、哲学、文学理論、社会学やカルチュラル・スタディーズ、言語学、歴史学など――があれば、この学問への扉は開かれているのです。

それでは、具体的に文化人類学教育のカリキュラムを紹介します。文化人類学を学ぶ院生は、かならず「文化人類学総合演習」を履修します。通年で6冊の（「古典」といわれている）民族誌を読み、教員全員と博士課程の院生一名を加えゼミ形式の討論をおこないます。本学府の文化人類学教育では、最近の研究動向だけではなく、文化人類学の基礎知識もしっかり習得することも目標です。次に、各教員の担当する演習を履修します。ここで、最近の研究動向が紹介されることになります。文化人類学以外の領域へと積極的に越境するテーマが選択されます。たとえば、先住民運動と国際法、30年代米国社会と民族誌、未開芸術と博物館展示、グローバル経済と文化のローカル現象などです。（各演習のシラバスは、比較社会文化研究院のHPにて掲載中です。）

修士課程や博士課程の院生たちは、文化人類学以外にも、社会学、歴史学、思想史などの演習にも参加し、自らの研究テーマに生かしています。また、九州大学の人間環境学府（箱崎地区）にて開講されている関一敏教授、浜本満教授、坂元一光教授などの演習を履修することもできます。

現在、修士課程と博士課程に合計21名の学生が在籍しています。なかには、フルブライト奨学金を獲得し、米国黒人たちの料理本と文化の継承についてフィールド調査中の院生、日本科学協会から助成を受け、モンゴルで伝統文化の再創造をフィールド調査中の院生、メキシコ政府奨学金を受給し、メキシコのペンテコステ派キリスト教徒の改宗について研究している院生、ミシガン大学交換留学生制度を利用し、ミンストレル・ショウの歴史について学んでいる院生もいます。

本学府は94年に創設されました。人類学は他の学問領域とは異なり、従来の書斎や古文書館での研究だけではなく、現地語の習得を前提としたフィールド調査が重要な位置を占めてきました。そのため、博士課程を修了するまでに、大学院修士課程入学から数えて10年くらいはかかります。本学府では、これまで2名が博士号を取得しており、現在数名が博士論文を執筆中です。博士号取得者あるいは博士課程満期退学者のうち2名は、研究者として（旧国立）大学に就職をしています。修士課程を修了した院生は、ほぼ100%就職しています。

これまで本学府で学んだ院生たちの多くは、自立した精神をもち、独自の関心を掘り下げる能力をもった人材でした。いまでも、その伝統は生きています。わたしたち教員は、既存のパラダイムのなかに閉じこもり、パズルを解くこと――自らはパズルをつくりださずに――だけに関心のある小器用さをもった人ではなく、荒削りでも広い知識と関心を大胆に結びつけ、自らの研究課題を構想できる独創性をもった人を求めています。

アマゾン先住民族カトゥキナの未来を担う子供たち

人文地理学を究める ―スキルアップしたい方へ―

1．比較社会文化学府における人文地理学教育研究

教育・研究機関の教員や研究者、地域政策分野での専門家等の人材育成をめざして、本学府の地域構造講座と基層構造講座の教員により、人文地理学に関する講義や演習が行われています（講義や演習の詳しい内容は次章以降をご覧ください）。どの講義・演習でも大学院生による人文地理学を基礎とする地域構造や地域政策に関する研究や、高等学校教諭教員免許状（地理歴史、公民）の取得等を支援する教育体制をととのえています。地域構造と地域政策に関しては本学府の教員を中心として、ミネルヴァ書房から本年（2006年）『地域の構造と地域の政策』が出版されましたので、そちらもご参照ください。

本大学院設置以降、人文地理学（含む社会開発論）を主な専攻として本学府の博士後期課程・同修士課程を修了した大学院生は、国内外の大学、中等教育機関、国際機関、行政機関、シンクタンク等に就職し、人文地理学の知識や研究成果を活かして、各分野で活躍しています。

2．人文地理学関係の教官紹介

以下では人文地理学関係の２名の教員を紹介します。

山下潤助教授：専門である都市地理学を基礎とし、都市の環境や厚生を対象として、地域構造の視点から各種の地域政策・計画の実態をGIS（地理情報システム）等を用いて把握するとともに、それらの課題についての研究を深めています。近年は緑地の減少や地球温暖化と都市構造と関係やこれらの環境問題に対処するための地域計画に関する研究をすすめています。

佐藤廉也助教授：文化地理学を専門とし、人類史的な視野から様々な文化における人間行動を研究しています。現在は特に、焼畑移動農耕、山地農耕、狩猟・採集活動など、かつての人類が主要な生業としていた活動を対象とし、環境利用の実態とその人類史的な意味を説明することを課題としています（右図参照）。主にアフリカと中国でフィールド研究をおこない、「森林移動農耕社会の集落動態」、「移動農耕社会の出生・死亡動態と定住化による人口転換」、「森林・サバンナの動態と人間活動の影響」、「中国黄土高原における退耕還林政策と土地利用変化」などの研究プロジェクトをすすめています（本頁、右上図参照）。

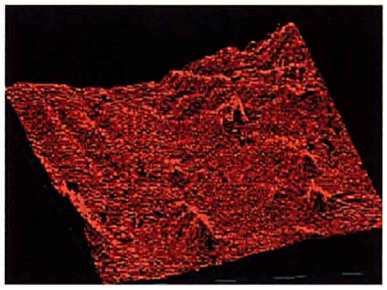
3．講義・演習の内容

平成18年度では、人文地理学と関連した以下のような講義・演習を開講し、大学院生の研究を支援しています。

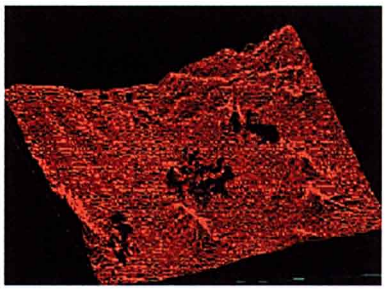
①講義

山下：「都市政策論」を担当。都市における持続可能性という視点から、17年度の *Sustainable Urban Development Reader* に引き続き、*Environmental Land Use Planning and Management* を大学院生の皆さんと輪読し、環境に配慮した土地利用計画・管理への理解を深めています。

佐藤：「環境と人類」を担当。文化生態学、行動生態学、生態人類学を中心とする諸分野の文献を題材として、人間社会の動態を環境適応との関係において把握することをめざしています。



1967年



1999年

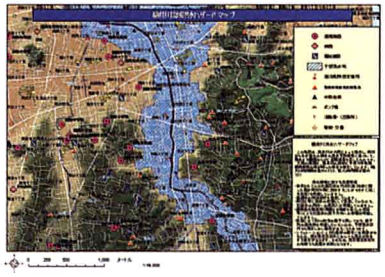
②調査研究方法論

技術資格取得を視野に入れ、GISの理論と技術の習得をめざし、実習を中心として講義を進めています。修得された技術は博士論文や修士論文等で活用されています（下図参照）。

③演習

各回のゼミ担当者による発表とゼミ参加者・教員との討議等を通じて、修士論文、博士論文、投稿論文等の完成度を高めるよう努めています。

これ以外に平成17年度まで、学府地域構造講座の産業地域政策論担当の教員により、工業地理学・地域構造論に関する講義・演習等が行われ、人文地理学分野の幅広い視点から大学院生の研究に助言をあたえていました。



4．他の研究院・学外との教育・研究連携

これまで述べた活動が主に本学府内での活動ですが、本学府の人文地理学グループは、学内外の人文地理学関係機関との連携も深めています。たとえば人文科学研究院歴史学部門地理学講座と連携し、18年度から全学教育「人文地理学」を担当しています。くわえて人文科学研究院等の教員とともに全国学会である人文地理学会を17年度に六本松地区で開催する一方で、福岡教育大学等の教員とともに福岡地理学会を運営し、年２回の発表会を実施しています（人文地理学会の開催に関しましては比文広報誌「Crossover」19号をご参照ください）。さらに国外機関との交流に関しては、平成15年以降、忠南大学校と地域政策に関する共同セミナーを開催し、福岡地理学会と同様に、本学府の大学院生が活発に研究成果を発表しています。

【お問い合わせ】山下、佐藤までご連絡下さい。

たとえば「漫画」を研究したい人に

新しい研究を望む人、従来に無い研究を始めたい人、そういう人に、この大学院は研究の場を提供できます。

例えば、「漫画」は、まだ社会的には、学問として認知されたわけではありません。しかし、そんなこととは無関係に日本の漫画は、出版界における規模、経済効果、社会的影響力等、すでに無視することのできない大きな存在となっています。また、アニメ映画ともども、海外でも高い評価を受けており、日本文化としては例外的な輸出超過分野となっています。

それなのに肝心の日本で、本格的な研究がまだまだというのは寂しいかぎりです。誰か意欲的な学生で、真剣に研究してみたいという人はいないものでしょうか。そういう人にこの大学院は、研究の場を提供することができます。

指導教員団には、どの分野の先生を選んでもけっこうです。何故なら、社会学、文学、言語学、作家と作品論など、自分が何を研究したいか、その研究テーマによって、組み合わせが変わってくるからです。

いま、我々の取り組んでいる内容は次のようなものです。

阿尾安泰

漫画には漫画の「語り方」があります。それがあるために、ごく「自然」に読まれています。その枠組みがどのような文化的条件の規定を受けているのか、いかなる権力関係を前提にしているのかなどの問題を考えていきたいと思います。

松村瑞子

漫画に見られる現代日本語における言語とジェンダーの関わりについて（例えば男女の丁寧さのストラテジーの相違など）社会言語学的に考えていきたいと思います。

因　京子

漫画は日本語の話しことばの宝庫です。具体的な場面と共に言葉が呈示され、時には登場人物の心のつぶやきと実際に口にした言葉とが二本立てで出てくることもある。しかも、漢字にはルビがついている…　これを日本語教育に利用しない手はありません。漫画を、文化や社会に関する情報を豊かに含んだ総合的教材として利用する方法を考えたいと思います。

杉山あかし

コミックマーケット66ではコミックマーケット準備会と共催でコミケ30周年記念アンケート調査を実施しました。サークル参加者37,620名、一般参加者1,482名、スタッフ参加者336名という、この種の調査で今まであり得なかった規模で（というか、文化研究分野全体でも空前の）ご回答をいただきました。ここに表れた参加者像は……世の「オタク」観のいかに見当外れなことか。

この他にも、たとえば、

①漫画を通じて日本文化の特徴をさぐる。
②女性漫画からみた男女共生学。
③産業としての漫画、アニメ（外国への売り方、等）を考える。
④社会学の立場からのアプローチ。
⑤アジアにおける日本漫画の受容と影響。
⑥文学研究の方法を用いた作家と作品研究。
⑦漫画で村おこし等、地域の活性化への利用。

など、いろいろの研究テーマが考えられるでしょう。

勿論、漫画が好き、だけでは研究者にはなれません。幅広い知識を持った、論文を書く能力のある人で、ユニークなアイデアを持つ人を歓迎します。するどい問題意識を持って、境界を超えて勉強できることが、この大学院の特徴の一つなのです。

新しい学問に限らす、従来の学問でも同じ事ですが、教員の指導は最後には関係ありません。論文をしあげるのは本人なのです。自分が何をやりたいのか、その目的意識のはっきりした人の中から、新しい時代にふさわしい、新しいテーマの研究者が育ってくることを期待します。

オリジナルな感性を持ち、研究能力があって意欲のある人、狭い範囲に留らない研究をしたい人……私たちスタッフは、そういう人を募集いたします。

ロマン主義研究コース　グローバルな研究領域とトータルな視点

担当者：太田（一）、阿尾、嶋田

これまで個別的な狭い領域で扱われてきたロマン主義を新たな形で、総合的に研究していくことを目指す。

A：研究方針

1：空間領域の拡大

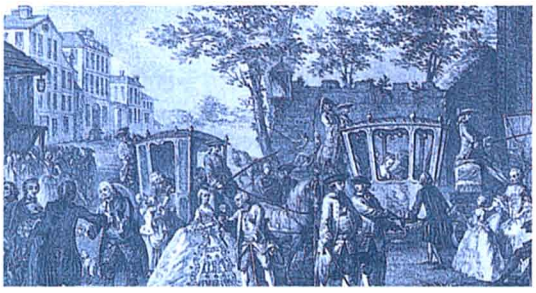
ロマン主義を国別で考察するだけでなく、その全体の動きを研究する。各研究者（上記担当教員）たちの連関を図りながら、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツにおけるロマン派の動きを追い、主要ヨーロッパの領域とアメリカの状況の把握に努める。

2：時間領域の拡張

ロマン主義は決して19世紀だけの事象ではない。着実な研究のために、その思潮が準備された16世紀から、その影響が及んでいる現代にまで検討領域を拡げる。

3：研究対象の転換

研究対象も従来のように、文学、思想などの領域だけに限定されない。様々な領域の複合的な作用から生み出される文化を研究するために、ロマン主義的感性の生成に関連のある資料を、政治、歴史、社会などの分野からも求める。



B：総合研究テーマ

1：近現代文化論

ロマン主義文化を「知」の問題のひとつと捉え、それを構成する条件を考察する。文学、歴史、思想などの分野の検討にとどまらず、社会科学、文化人類学、精神分析学、医学などの研究動向も踏まえていく。

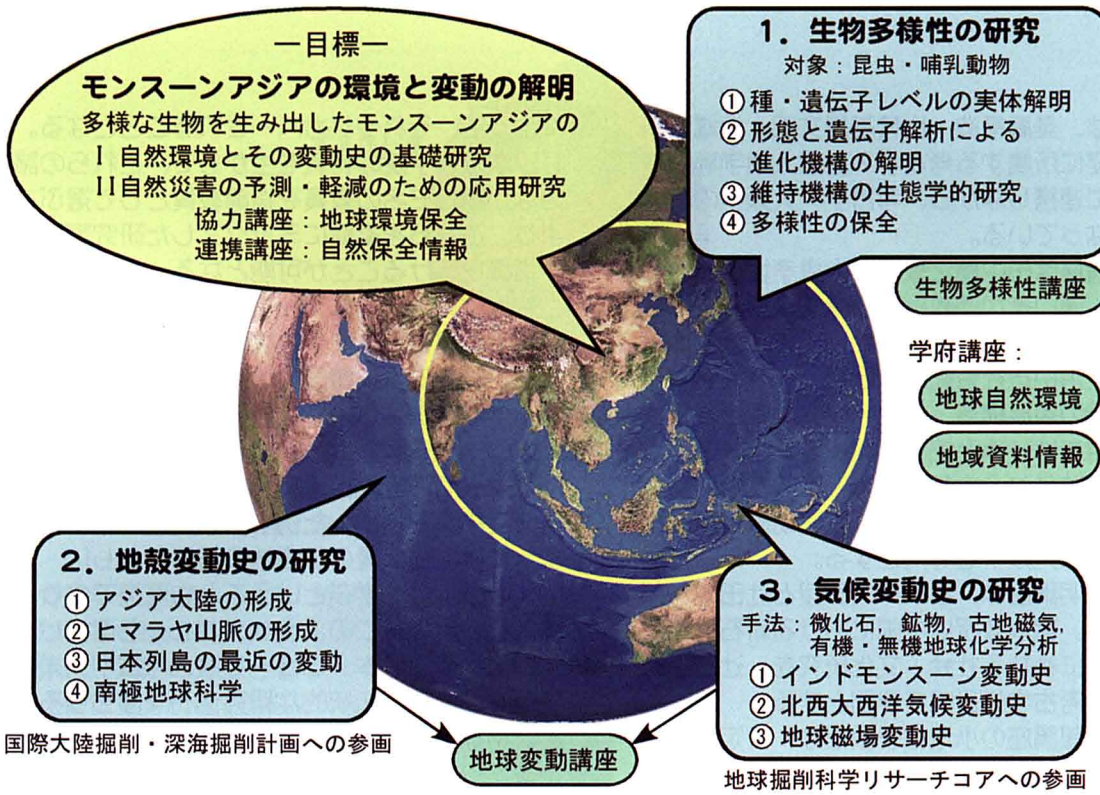
2：自然表象論

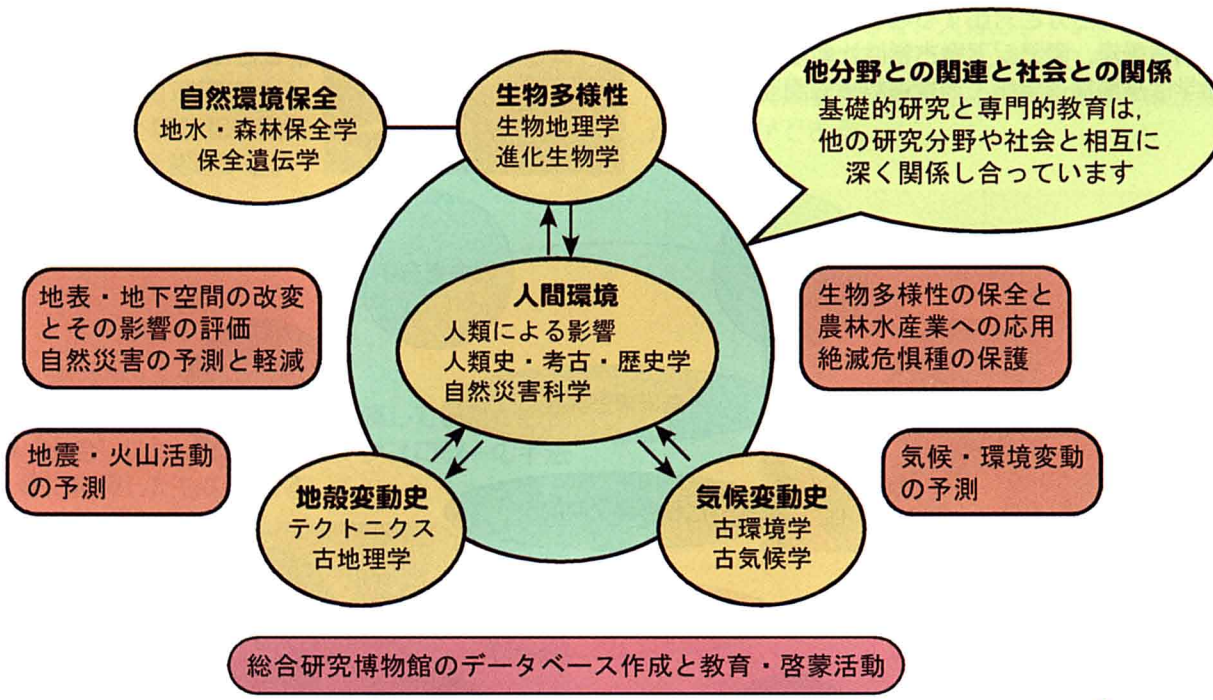
「自然」という表象について考える。自然と文学、自然と人間の関係を研究しながら、そこに新たに「環境」やエコロジー等の視点も導入しながら文化の歴史を読み変えていく。

3：文化空間交流論

大きな活動領域を示してきたロマン主義をトータルな形で考える。様々な諸文化空間の影響関係の問題、そして翻訳などを始めとする文化伝達のメディアの問題を考察する。

比文理系の研究・教育とその展望





<長期ビジョン>
モンスーンアジアの自然環境の変遷 ⇆ 人類史・歴史とのリンケージの解明
文理融合型の学際的研究への展開

考古学・人類学メニュー

本学府では、基層構造・比較基層文明・地域資料情報の三講座に所属する考古学・自然人類学専攻の教員が相互に連携しながら、考古学・人類学の研究教育をおこなっている。

基層構造講座は田中良之教授、中橋孝博教授、岩永省三教授、溝口孝司助教授、佐藤廉也助教授の五名で構成される。田中教授は主として縄文土器や他の文化要素を用いた社会動態の研究、及び人骨を用いた原始古代の親族構造・儀礼の研究、中橋教授は日本人起源論をはじめとする形質人類学的研究、岩永教授は弥生時代から古代の社会変動論、溝口助教授は弥生社会論及び理論考古学、佐藤助教授は文化地理学及び生態人類学を専門とする。

比較基層文明講座は、宮本一夫教授と辻田淳一郎講師から成る。宮本教授は中国における新石器時代から国家段階にわたる社会・文化研究を、辻田講師は古墳時代の考古学的研究を専門とする。

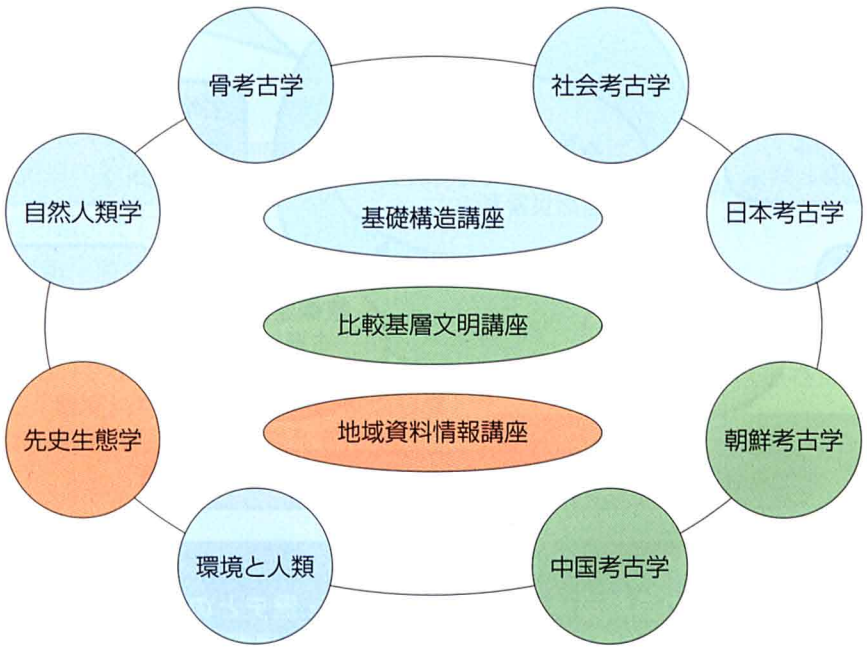
地域資料情報講座の小池裕子教授は、安定同位体分析や、脂質分析、DNA 解析などの分析諸法を駆使した先史生態学的研究を専門とする。

従来の研究区分と対比するならば、日本考古学は基層構造講座、東アジア考古学は比較基層文明講座、人類学は基層構造講座と地域資料情報講座の各教員によって、それぞれカバーされることとなる。しかし、学際大学院の特質を生かして、これらの諸分野のなかから三名の教員を指導教員として選ぶことにより、これらを柔軟にミックスした研究課題の選定や指導をうけることが可能となる。

院生は、伝統的なテーマの研究はもちろんのこと、学際性に富むテーマへの挑戦もおこなっている。例えばこれまでに、韓国古墳時代の社会構造分析に骨考古学的方法を応用した研究がおこなわれた。また、上にのべた三講座以外の教員を指導教員に加えることによって、近世墓にあらわれた「家」意識に関する修士論文を提出した例もある。指導教員の選択によっては、古人骨の調査法の習得とともに、考古学の先端の理論を学ぶということも可能であり、実際に多くの学生がこのようなメニューを選択している。

このように、本メニューでは、考古学・人類学を柱としながら、伝統的な研究テーマはもちろんのこと、学際的テーマの専攻を可能とする指導体制をとっているのである。

下図にテーマと講座の関係を色わけで示した。学生はここにあげたテーマを柔軟にミックスした研究課題を選定し指導をうけることができる。

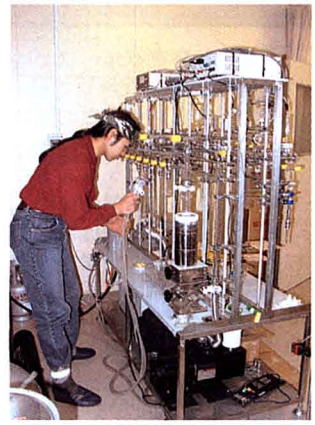


1ｇの人骨から古代人の生活を探る

日本社会文化専攻の地域資料情報講座は、骨格標本や剥製標本など様々な`Materials 資料'から、最新の分析手法を用いて食性や遺伝的背景など必要な'情報'を取り出すことをめざしている。

1　人骨の年代測定

人骨がいつの頃の時代に属する"年代"測定の方法として、加速機質量分析機を用いる高精度年代測定が注目されている。極微量な人骨試料から抽出されたコラーゲン蛋白を、写真の真空ライン精製装置を用いて CC_2ガスにし、名古屋大学年代測定研究センターのタンデトロン加速機質量分析機で^{14}C を測定する。



2　人骨を用いた食性分析

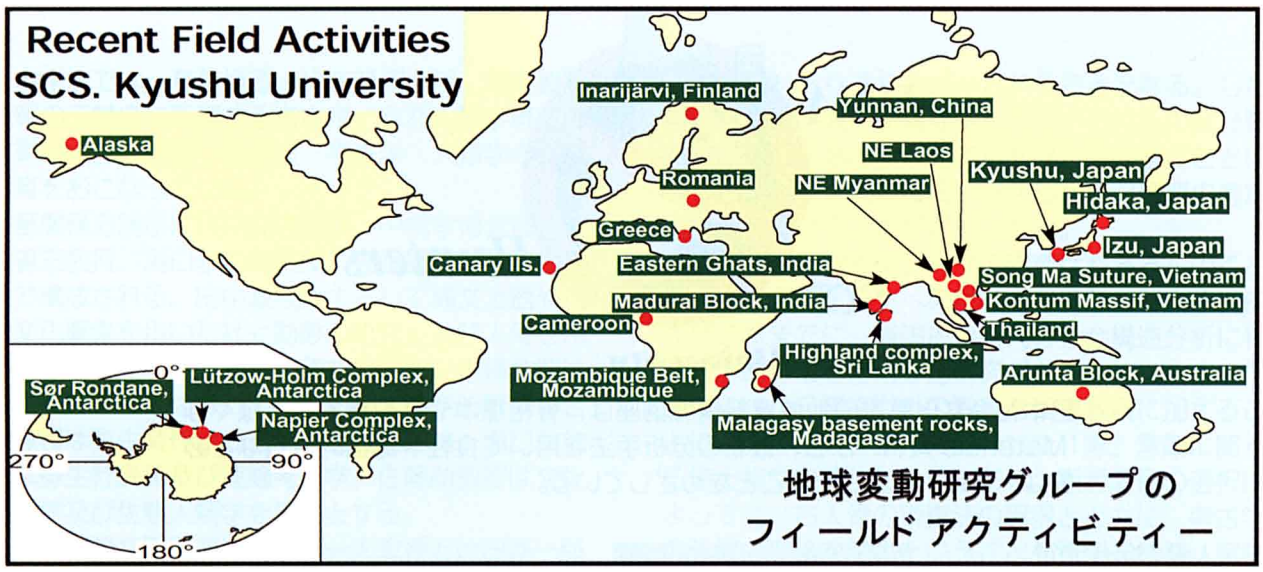
古代の採集狩猟民や初期農耕民が何を食べたか"食性"分析法として、人骨コラーゲン蛋白を用いたアイソトープが有効である。写真の ANCA-mass（全自動炭素窒素安定同位体質量分析機）は正確迅速に測定ができる。

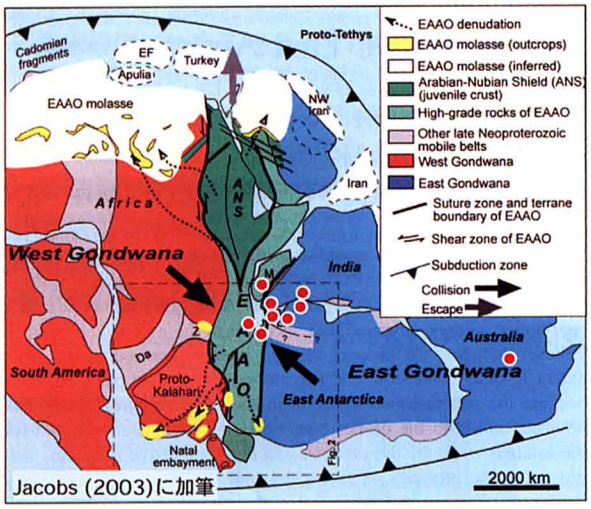
3　人骨の DNA 分析

埋葬人骨がどういう民族集団に属していたか古代人の"出自"について、バイオテクノロジーの手法を人骨に応用したものである。

地球創生期から現在まで

フィールドワークから地球変動現象を探る





復元されたゴンドワナ超大陸における地球変動グループの調査地域（赤丸）
現在は環インド洋に広がる調査地域も，ゴンドワナ超大陸の時代には超大陸中央部に集中していたことがわかる

地球変動研究グループでは，地質学，岩石学，地球化学，地球物理学の様々な手法を駆使して，40億年を越える地球創生期の大陸形成から現在の活発なマグマ活動にいたる全地球史的な地球変動現象を研究対象とし，熱帯ジャングルから極域までの汎地球規模でフィールドワークを展開している．得られた試料は，精密かつ最新の分析・実験システムで解析を行っている．

大学院生も，国内はもとより世界各地で意欲的にフィールドワークを実施し，科学を推進する上で重要な“発見”する醍醐味を体験している．国立極地研究所・地圏研究グループとの連携大学院講座も予定されており，今後は本学大学院学生として，南極・北極の調査観測に参加することも想定される．

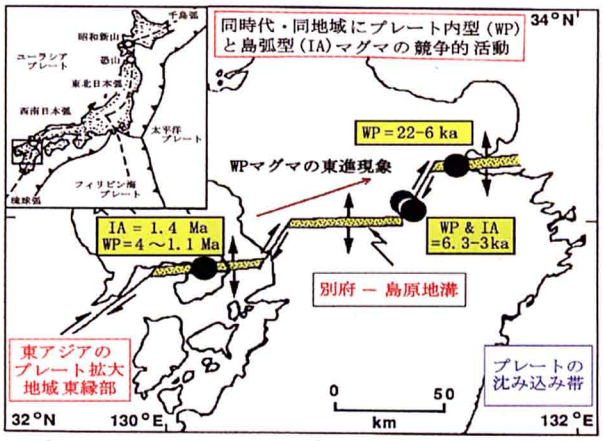
東南極・太古代ナピア岩体の調査

噴火直後の雲仙火山を調査する

本研究グループで進行中の主な研究課題

- ◆ 極東ユーラシア（アジア）の大陸地殻形成過程
- ◆ ゴンドワナ・ロディニア超大陸の形成・分裂過程
- ◆ 国内各地の変成帯の総合解析
- ◆ 極限変成作用の精密解析
- ◆ 東アジアの第四紀競争的マグマ活動
- ◆ 地中海地域のサブダクションに関するマグマ活動
- ◆ 大西洋地域火山体の地球物理学的観測
- ◆ 伊豆半島東方沖地震の地球科学
- ◆ 地球創生期の始原的大陸地殻形成機構

地域資料情報講座：小山内康人　教授
地球自然環境講座：北　逸郎　　教授
〃　　：大野正夫　助教授
URL：http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/earth/



東アジアのプレート拡大地域とフィリピン海プレートの沈み込み帯の境界領域に位置する別府―島原地溝帯のオープニングとその中の異なるマグマの同地域・同時代の競争的活動

ヒマラヤとモンスーン研究グループ

アジアの気候システムの中核を成すモンスーンは，ヒマラヤ・チベット山塊の上昇と伴に誕生し変動してきたと考えられている．私達の研究グループでは，ヒマラヤ山脈の形成時期と形成プロセス・メカニズムを明らかにすると同時に，モンスーン気候がいつ形成され，どのように変動してきたのかを解明するために，２つの研究プロジェクトを実施している．皆さんも地球科学のフロンティアを開拓する私達のプロジェクトに参加しませんか？

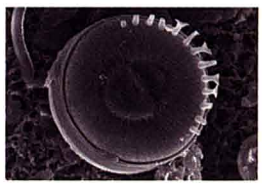
モンスーンアジアの起源を探る
ヒマラヤ山脈の上昇とモンスーン変動

＜変成岩ナップ前進プロジェクト＞
ヒマラヤ山脈の上昇のダイナミクスを
変成岩ナップの前進・冷却史から解く

＜古カトマンズ湖掘削プロジェクト＞
過去200万年のインドモンスーンの
変遷史を微化石と粘土から解明する

＜プロジェクトチームの編成＞

ジルコンFT



珪藻化石

古気候変動史
- 花粉分析
- 植物化石
- 粘土結晶化度
- 有機化学分析

地表地質調査

堆積環境の復元
- 珪藻化石分析
- 堆積相解析
- 粘土鉱物組成
- 無機化学分析

Paleo-Kathmandu Lake project

Tectonics-Climate Linkage

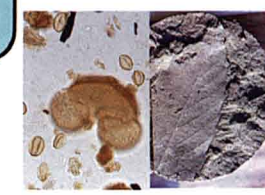
Himalayan Nappe project

年代の目盛り
- 古地磁気測定
- AMS^{14}C年代測定
- ^{40}Ar-^{39}Ar年代測定
- FT年代測定 (Zr, Ap)

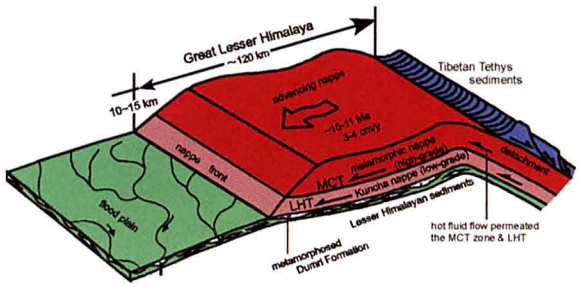
地表地質調査

冷却・変形史
- FT熱解析 (Zr, Ap)
- 冷却履歴の解析
- 微小構造解析
- 炭化物反射率測定

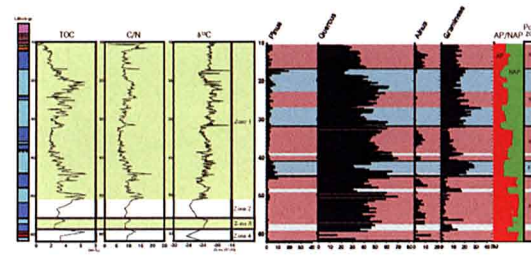
今後の研究展開
東アジアのテクトニクスと古気候変動
インド洋・南シナ海の深海掘削 (IODP)



花粉化石　植物化石



ヒマラヤ山脈は1400万年前には誕生していた！



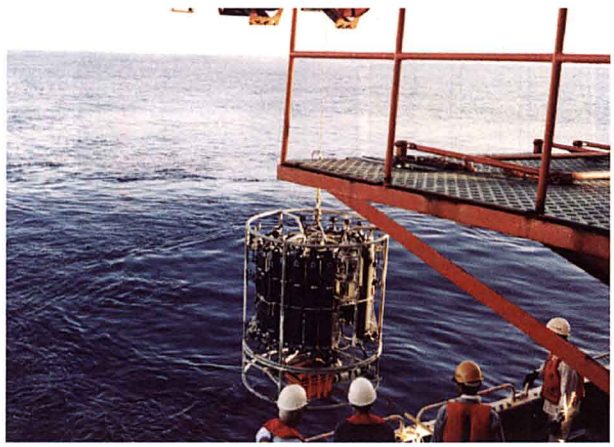
12.5～1.2万年前の古気候変動の復元

研究グループ構成メンバー：酒井治孝 (代表)，大野正夫，桑原義博，山中寿朗，藤井理恵
他９つの研究機関との共同研究プロジェクト
ホームページURL：http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/earth/

物理・化学の目で地球環境を調べる

教室で学んだ物理学や化学を野外調査に応用して地球環境を調べることができます。気候変動など地球の表面のことはもちろん、地下や地球の周りの宇宙空間も研究の対象です。

地球自然環境講座では、地震波や電磁波を観測したり、地下から湧き出てくる水やガスの化学分析を行って、地震の発生や火山の噴火の仕組みを研究しています。また、気候変動の復元を目指して、地層中に保存された有機化合物やその安定同位体組成、あるいは、岩石の磁性の分析を行っています。さらに岩石・鉱物の分析によって地殻深部・マントルの構成物質を明らかにする研究を進めています。



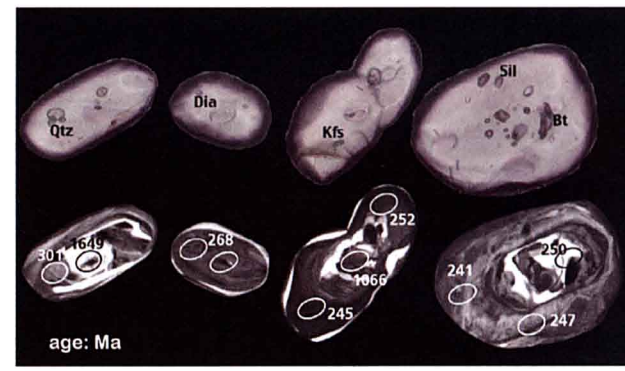
「生命はどんな環境で芽生え進化したのか」といったテーマから、「なぜ地球に磁場があるのか」というようなテーマまで幅広く取り組んでいます。

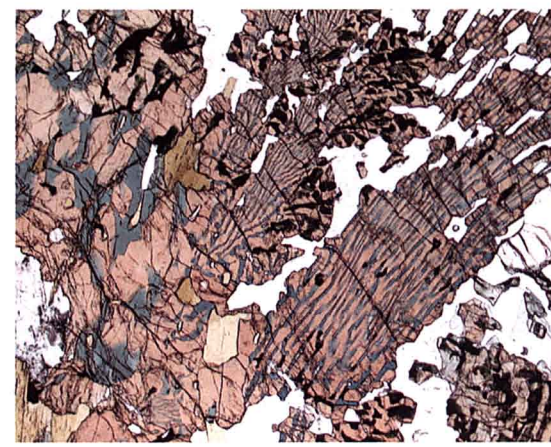
私たちは、このような研究のため野山を駆け、船（ときには潜水艇）で海を巡っています。あなたも参加しませんか？

研究グループ：

大野正夫、北逸郎、小山内康人、山中寿朗

URL：http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/earth/





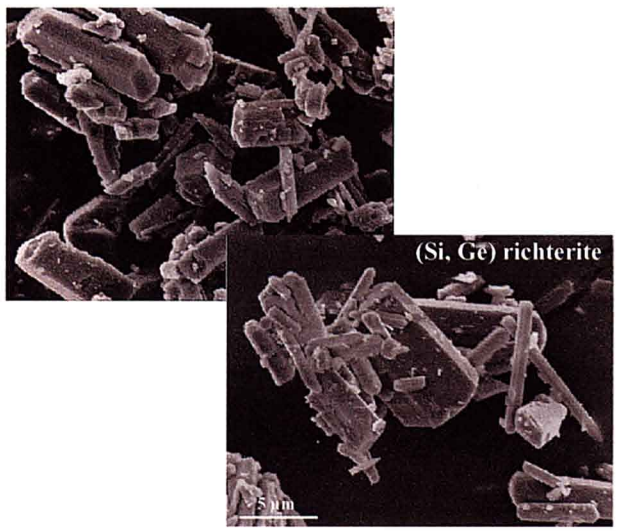
物質科学研究グループ

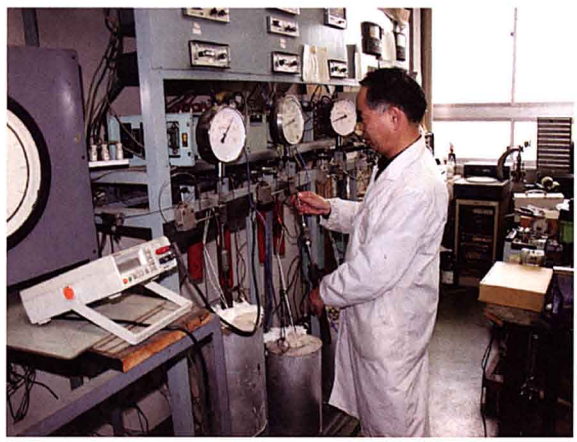
私たちの研究グループでは、地球を構成する基本単位“鉱物”を対象に、X線回折装置、透過型・走査型電子顕微鏡、原子間力顕微鏡、赤外分光などの分析機器を駆使し、また、リートベルト解析、X線プロファイル・フィッティング解析、顕微鏡画像解析などの最新の鉱物学専用プログラムソフトを用いて、日夜、ミクロな世界を探っています。皆さんもミクロな世界の謎の解明に挑戦してみませんか？

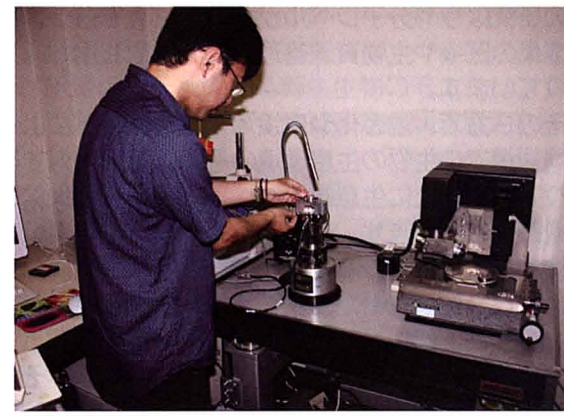
主要造岩鉱物および環境指標鉱物の鉱物化学的研究

主要造岩鉱物の角閃石族鉱物と、環境指標鉱物として重要な層状珪酸塩鉱物の結晶化学的研究を行っています。それらの天然での生成条件や変成・変質過程を究明し、地球環境にやさしい産業廃棄物処理法の確立を目指しております。すなわち、様々な化学組成の鉱物を実験室で合成し、共同利用の各種分析機器、すなわち超高圧電子顕微鏡室の各種透過型電子顕微鏡(EDS, EELSを含む)、中央分析センターの赤外分光分析装置をはじめ熱分析および各種元素分析装置を用いて鉱物化学的検討をおこなっています。

石田清隆（地球自然環境講座）
E-mail:kiyota@scs.kyushu-u.ac.jp



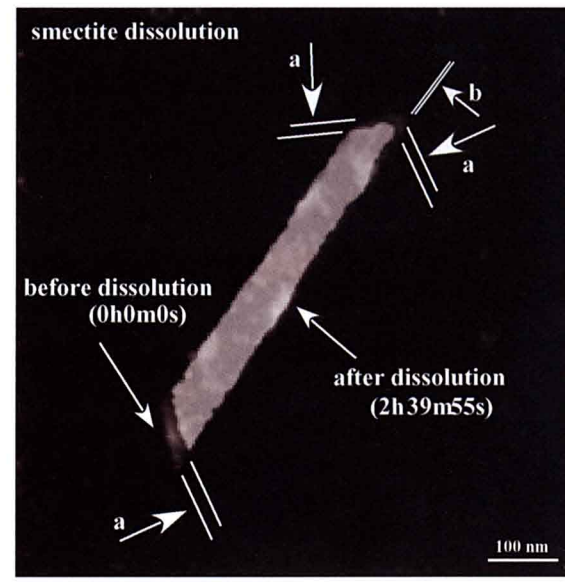




鉱物は地球環境の過去・現在・未来を語る！

鉱物には、地球の過去の気候や環境を復元し、未来の環境を予測するための指標になるものがあります。例えば、イライトと呼ばれる雲母粘土鉱物の結晶化度を精確に求めることにより、そのイライトがもたらされた当時の気候が乾燥であったか湿潤であったかを推定することができます。また、放射性廃棄物地層処理場の緩衝材として期待されているスメクタイトの溶解速度・機構を解明することにより、処理場周辺の環境変化を予測し、長期的な安定性・安全性を評価することができます。皆さんも私たちといっしょに、鉱物を研究することで、過去の地球環境を復元し、未来の地球環境を予測してみませんか？

桑原義博（地球自然環境講座）
E-mail:ykuwa@scs.kyushu-u.ac.jp



自然史研究・生物体系学

生命科学の急速な発展は、ミクロな面での生命現象の解明に大きな役割をはたしてきました。生命現象の研究は今や分子レベルが主流を占めており、研究成果の医療や生物資源管理への応用や利用もはかられています。

その一方で、温暖化や環境汚染、開発などによる地球規模での生物の生息環境の悪化は速度を増すばかりで、地球上に生息するすべての生物に重大な影響を及ぼしています。そのような現在、生物環境の評価や地域生物相の解明とインベントリー作成、生物の行動や生活史戦略、生物多様性と系統進化など、生物を丸ごと個体レベルや群集レベルであつかう学問の必要性は非常に高まっているといえます。それにもかかわらず、そのような研究が行われている研究機関は、日本では少数です。

私たちは、主に昆虫の系統分類学を研究する３名の教員を中心に、昆虫やそれ以外の生物の自然史や系統体系学、分子系統学、行動生態学、環境モニタリングなどを研究する院生たちと一緒に「生物体系・自然史教室」という研究グループを作っています。研究対象や研究課題によってフィールドもシーズンも違い、研究手法や使用する機器もずいぶんと多様ですが、土曜や日曜も、正月にもかならず誰かが出てきて仕事をしている研究室で、日常的な討論とみなが一堂に会してのゼミ、学会の合評会などで相互に批判し啓発しあいながら、研究を進めています。大自然のなかで生物の生活の複雑さを探り、生物多様性を実感したい人はもちろん、生物を丸ごとあつかってその系統分類や生物地理、行動や生態などを研究したいという意欲あふれる人達は大歓迎です。皆さんも、私たちと一緒に研究生活をおくりませんか？

地域資料情報講座：矢田　脩教授
地球自然環境講座：嶌　　洪教授
荒谷邦雄助教授

ホームページ
http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~shima/home.html

私たちの研究グループで現在進行中の主な研究課題

- コガネムシ上科の系統進化と生態
- ヤドリバエと高等ハエ類の系統分類と生態
- チョウ類の自然史および系統進化
- チョウ類の保全生態
- 相思鳥の行動生態
- クワガタムシ類の分子系統
- ツノクロツヤムシの行動生態
- 輸入甲虫の生態と環境への影響
- ノネコの行動生態
- ミスジチョウ亜科の系統分類
- カメムシ寄生ヤドリバエの系統分類
- マネシアゲハの系統進化
- シジミチョウ科の系統分類と分子系統
- ノミバエの系統分類

自然保全分野

(Laboratory of Nature Conservation)

日本社会文化専攻の地域資料情報講座は、㈶自然環境研究センター(Japan Wildlife Research Center、JWRC)と連携講座を開設しています。地球規模の自然保全のために、海外での保護地区調査や日本各地の野生生物の調査活動に多くの研究成果を挙げております。

多彩な大学院教育

- 総合演習：研究計画や論文完成にむけて、複数教員を交えて熱心な質疑応答が行われます。
- 集中講義:自然保全情報・自然保全政策論・自然保全管理論が、集中講義として行われています。
- 調査研究方法論：自然保全情報分野のフィールド生態調査の指導(修士学生対象)やアイソトープ分析など化学分析の実習を行い充実を図っています。
- 東京の自然環境研究センターにおいても論文指導を行うので、首都圏在住のまま学位が取得できる利点があります。

研究テーマ

〈保全生態学関連〉

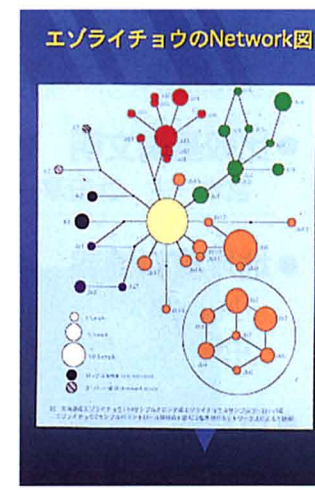
「絶滅のおそれのある野生生物のモニタリング」
「世界遺産の自然保全地域策定の調査協力」

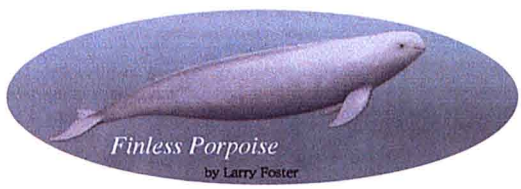
〈保全遺伝学（DNA）関連〉

「タイマイ・アフリカゾウなど CITES 関連調査」
「ライチョウ・ナベヅルなど希少生物種の調査」
「ツキノワグマなど希少生物種の調査」
「鯨類の遺伝的多様性の調査」

〈保全栄養学（アイソトープ）関連〉

「マングローブ林の生物多様性調査」
「サンゴ礁の生態特性の調査」
「象牙の原産国判別調査」





教員紹介

日本社会文化専攻

● **社会構造** P33
有馬　學　吉岡　斉　吉田昌彦　杉山あかし
直野章子

● **文化構造** P34
清水靖久　松本常彦　西野常夫　波潟　剛
施　光恒　大杉卓三

● **地域構造** P35
高野信治　三隅一百　山下　潤

● **経済構造** P35
荻野喜弘　関源太郎　北澤　満

● **産業資料情報** P36
三輪宗弘　宮地英敏

● **基層構造** P37
田中良之　中橋孝博　岩永省三　溝口孝司
佐藤廉也　石川　健

● **比較基層文明** P37
宮本一夫　辻田淳一郎

● **地域資料情報** P38
小山内康人　小池裕子　服部英雄　矢田　脩
中野　等　宮崎克則　馬場芳之

● **自然保全情報** P39
米田政明　松島　昇　菰田　誠

● **日本語教育** P40
松村瑞子　山村ひろみ　因　京子　小山　悟
西山　猛　松永典子

国際社会文化専攻

● **アジア社会** P42
森川哲雄　清水　展　太田好信

● **欧米社会** P42
高田和夫　古谷嘉章　嶋田洋一郎
柄谷利恵子

● **比較文化** P43
高橋憲一　根井　豊　新島龍美　鏑木政彦

● **比較政治** P44
大河原伸夫　岡崎晴輝

● **異文化コミュニケーション** P44
ミヒェル・ヴォルフガング　井上奈良彦
小谷耕二　鈴木敦典

● **国際言語文化** P45
太田一昭　阿尾安泰　松原孝俊　秋吉　收
李　一清

● **地球自然環境** P46
嶌　洪　北　逸郎　酒井治孝　石田清隆
大野正夫　荒谷邦雄　桑原義博　山中寿朗
藤井理恵

● **地球環境保全** P47
矢幡　久　黒澤　靖

社会構造講座

教授
有馬　學

日本近代史専攻。主たる研究分野は大正～昭和戦前期の政治史。最近は翼賛体制期の権力構造をどのように特徴づけるかという課題に取り組んでいる。また、広く近代日本の地域史研究にも関心があり、資料発掘も進めている。

教授
吉岡　斉

専攻分野は現代史です。とくに科学・技術に関連する活題を得意としております。核エネルギーをはじめ「ハード」な分野が得意なのですが、最近は医学・医療など「ソフト」な分野にも研究関心を深めています。現代史の研究は政策決定の基礎であるとの信念から、原子力政策論争などにも、深く係わっています。

教授
吉田　昌彦

日本の前近代から近代への移行メカニズム解明をメインテーマとし、近世国家の如何なる枠組みが維新変革を規定したかという問題を、特に朝幕藩システムの変動や討幕主体析出を中心として検討している。また、古代から近世にいたる前近代国家論や近代天皇制と「臣民」の心性との関連についても関心を持っている。

助教授
杉山あかし

大きな枠組で言えば社会学、その中で特に、マス・コミュニケーション論、情報化と社会変動、社会理論、文化的再生産論、カルチュラル・スタディーズといったところを主要研究領域としています。批判的、葛藤理論的な立場から、「軽く」見える様々な現実の背後に確固として存在する社会的必然性（法則性あるいは理論）に迫りたいと考えております。

助教授
直野　章子

社会学、カルチュラル・スタディーズ。記念碑、博物館、証言集などのマテリアルカルチャーを手がかりに、社会的な記憶が生成される過程を、“Nation”の（再）生産との関係で分析。特にヒロシマの被爆の記憶について研究しており、被爆者から聴きとり調査を行っている。また、「記憶」「補償」「償い」などをキーワードに、植民地支配や戦争の暴力に曝された人たちが、いかにして回復へと向かうことが可能なのか、もしくは不可能なのかを考えている。暴力と表象の関係、トラウマ研究にも関心がある。

ARIMA Manabu

YOSHIOKA Hitoshi

YOSHIDA Masahiko

SUGIYAMA Akashi

NAONO Akiko

文化構造講座

教授
清水　靖久

日本近代の社会思想史、政治思想史を研究している。これまで20世紀初頭の社会批判、政治批判の思想に関心を注いできた。とくに木下尚江について、そのキリスト教、民主主義、社会主義、非戦論の思想とその後の軌跡を解明してきた。これからは広く20世紀を通して研究したいと考えている。

教授
松本　常彦

専攻は日本近代文学、とくに芥川龍之介を中心とした小説研究。小説が文学に限らず種々の言説領域を摂取し、自らを編みなす言説編成の様相を具体的な作品に即して考える作業を続けている。たとえば芥川の歴史小説は古典の焼き直しと称されることも多いが、その古典の焼き直しが、なぜ現代小説足り得たのであろうか。そうした問題に応じるために、その小説を同時代言説のネットワークの中に置いて眺めてみるといった作業をしている。

助教授
西野　常夫

比較文学。日本近代文学を、西洋文学からの影響に注目しながら、読んでいる。とくに、実存主義や象徴主義の要素を感じさせる作品に興味がある。日本近代詩の形成、異文化間におけるモチーフやテーマの表現方法のちがい、翻訳、翻案といった問題にも関心がある。

助教授
波潟　剛

日本近現代文学・比較文学専攻。安部公房をはじめ、日本あるいは東アジアにおけるアヴァンギャルドの受容と変容について研究してきました。現在は1930年代、とくにモダニズムとエキゾティスムのかかわりに興味を持っています。

助教授
施　光恒

政治理論・政治哲学。特に現代リベラリズム論、人権論。今後数年間は主に、東アジアなど非欧米社会にも受容しやすい人権論の構築、リベラルな国家におけるナショナリティやエスニシティの適切な位置づけ等の課題に取り組みたい。

助手
大杉　卓三

専門分野は情報社会論。インターネットや携帯電話の普及といった情報化が引き起こす社会経済の構造変動が研究対象。そのなかでも地域情報化論を主たる研究テーマとしている。地域情報化という言葉のなかには、政府や地方自治体の地域政策としての意味や、NPOなど非営利団体がとりくむ情報化を利用もしくはそれ自体を目的とした社会運動としての意味などが幅広く含まれている。そのため実際の研究も地方自治体の情報ネットワークインフラ整備から利活用促進の取り組み、電子自治体の構築、また情報化に関わる非営利団体の活動などを幅広く扱っている。

SHIMIZU Yasuhisa

MATSUMOTO Tsunehiko

NISHINO Tsuneo

NAMIGATA Tsuyoshi

SE Teruhisa

OOSUGI Takuzo

地域構造講座

教授
高野　信治

主従制・官僚制・領主制をキーワードに近世日本の民衆支配のメカニズムの解明をめざし、民俗学等の視角も摂取しつつ成果の一端を『近世大名家臣団と領主制』（吉川弘文館、1997）や『藩国と藩輔の構図』（名著出版、2002）としてまとめた。さらに今後は、領域（支配）と地域（生活）の社会空間的相関性を自己（個我・共同体・民族・国家）という他者という切り口から考えてみたい。

助教授
三隅　一百
（ペンネーム：三隅一人）

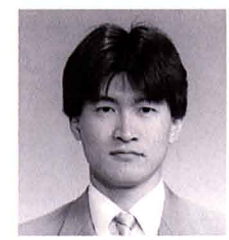
数理モデルによる社会学理論の構築のほか、量的・質的データ分析法に関心があります。公共財問題、地域紛争、社会階層と移動、役割論などいろいろつまみ食いしていますが、ミクロとマクロをつなぐ双方向的な社会的メカニズムを解き明かすことが目標です。

助教授
山下　　潤

都市部における持続可能な発展の進捗状況を測る持続可能性指標の開発も視野に入れ、国内外の地域開発論・都市政策論を厚生・環境に留意して地域構造の視点から持続可能な都市を軸として研究を進めている。さらに総合演習と地域調査論を通じて厚生、環境、社会、経済に留意した地域づくりに関するセミナーを開催してゆく。

TAKANO Nobuharu

MISUMI Kazuo


YAMASHITA Jun

経済構造講座

教授
荻野　喜弘

専攻は近現代日本経済史。大きな研究テーマはつぎの３つである。第１は日本石炭産業史研究で、具体的には資関係、カルテルと企業、石炭政策など。第２は地域経済史研究で、福岡県地域経済史、九州電気事業史、東アジアと上海石炭市場など。第３は「国家と市場」で、国家と労働市場、国家と商品市場など。

教授
関　源太郎

専攻は経済思想、政策思想、経済学史。現在の主たる研究テーマは、18～19世紀スコットランドの貧民救済問題に対する経済学的接近の理論、思想、政策の歴史的意義の解明、および、現代イギリスにおけるポスト・サッチャーリズムの政策思想の歴史的意味の検討であるが、戦前イギリスの経済思想の研究にも関心を広げつつある。

助教授
北澤　　満

近現代日本経済・経営史を専攻している。具体的には、戦前期の石炭産業史及び財閥史に関わる研究を行ってきた。石炭産業史については、北海道地方における個別企業経営、石炭カルテルの実態等を分析している。石炭産業の中心に位置したのが財閥系の企業であり、その産業構造の特質を把握するために財閥史の研究も進めてきた。主に石炭販売・金融について、財閥という組織内における企業間関係の分析を行っている。総じて「個別の事例分析の積み上げによって全体像の構築を目指す」スタイルをとっている。

産業資料情報講座

教授
三輪　宗弘

専攻は経営史と軍事史である。一次資料に準拠した歴史的なアプローチで、「エネルギー問題」を経済と軍事の両面から切り開いていきたい。あわせて「戦争」、「秩序」とは何かという問に正面から向かい合いたい。

助教授
宮地　英敏

専攻は近現代日本を対象とした経済史・経営史・社会史。 特に中小・小零細企業（今のところは主に陶磁器業）に注目しつつ、その歴史的な位置づけであるとか、それらを対象とした経済政策、貿易商社の果たした役割、技術導入の過程などを研究してきた。炭鉱関係の史資料が豊富な記録資料館（箱崎理系キャンパス）に研究室があるので、石炭産業へもフィールドを広げていこうと考えている。

OGINO Yoshihiro

SEKI Gentaro

KITAZAWA Mitsuru

MIWA Munehiro

MIYACHI Hidetoshi

基層構造講座

教授
田中　良之

専攻は日本考古学・先史人類学もしくは骨考古学。物質文化の諸属性の分析からその象徴性と階層性をとらえ、それらの時間的・空間的動態の検討から先史社会システムの研究を行っている。また、墓における考古学的情報と被葬者である出土人骨の遺伝的情報をあわせて検討することにより、原始古代の親族構造の分析も行っている。

教授
中橋　孝博

古人骨には古代の人間のみならず、彼らの生活や社会、自然環境に関する多くの情報が秘められている。生物としてのヒトを主な研究対象とする自然人類学の立場から、そうした古人骨をもとに日本人のルーツ問題や時代変化、性差、抜歯風習、寿命、人口変化などをテーマに研究している。

教授
岩永　省三

研究主題は、弥生時代の金属器とくに青銅器を中心素材として弥生文化の特性とその成因を解明すること。青銅器の機能変化と他の文化要素の時間的変化との連動関係の検討による社会・政治組織の変容の解明。弥生時代以降の国家形成過程の解明。古代国家形成に決定的影響を及ぼした７世紀後半から８世紀の対外関係を、都市構造の変化や仏教美術様式の時間的変化などから解明することなど。

助教授
溝口　孝司

専攻は理論考古学・社会考古学。事例研究のカヴァーするテーマは葬送行為、物質文化と社会構造、カヴァーする地域・時代は日本弥生時代、ヨーロッパ新石器・青銅器時代。本年度は１）葬送行為の変遷から見た北部九州弥生社会の構造変動の研究、２）北部九州弥生時代甕棺の分類学的研究に集約的に取り組む予定。学生諸君とともに考古学理論と実践のリンクを目指したい。

助教授
佐藤　廉也

専門は文化地理学・生態人類学。アフリカの森林域で長期にわたるフィールドワークをおこない、焼畑農耕、狩猟活動、森林産物の採集・利用、自然に関する民俗知識、集落動態、社会変化などの調査を続けるとともに、民族誌資料や空中写真、旧・新版地形図、リモートセンシングデータなどを活用することによって、人間社会と自然環境の動態的関係を明らかにすることをめざしてきた。近年は、遊動社会の定住化、動植物相の動態と文化・社会構造の関係、写真資料などを用いた過去の植生の復原手法、などのテーマにとくに関心を持っている。

助手
石川　　健

専攻は日本考古学。縄文時代における土器分析を中心とした当時の価値体系の復元を基に、先史社会における文化の構造変動の過程についての研究を行っている。また、このような研究と儀礼に関する研究も併行して行い、縄文から弥生への移行期直前段階における文化動態と社会動態との関連についての検討も行っている。

比較基層文明講座

教授
宮本　一夫

中国における農耕民と遊牧民の成立過程ならびにその後の文化接触について、新石器時代から殷周時代にかけて考古学的な研究を行っている。また、東アジア諸地域における狩猟採集社会から農耕社会の成立、その後の農耕社会の発展に関して、総合的な法則性と諸地域間の変異について比較研究を行っている。著書に『中国古代北疆史の考古学的研究』（中国書店、2000）がある。

講師
辻田淳一郎

専攻は日本考古学。古墳時代の日本列島における地域間関係、社会組織の変化過程に関する考古学的な研究を行っている。現在は特に東アジア世界の中の日本列島という視点から、古墳時代開始期における列島規模での威信財システムの成立・展開過程について分析を進めている。

TANAKA Yoshiyuki

NAKAHASHI Takahiro

IWANAGA Syozo

MIZOGUCHI Koji

SATO Ren'ya

ISHIKAWA Takeshi

MIYAMOTO Kazuo

TSUJITA Junichiro

地域資料情報講座

教授
小山内康人

南極、インド、マダガスカル、アフリカ等のゴンドワナ超大陸断片や日本・東アジア各地の高温～超高温変成岩類を研究対象とし、フィールドワークと室内実験から、40億年以上に及ぶ地球創生期からの花崗岩マグマの生成機構や大陸地殻進化テクトニクスの研究を行っている。

教授
小池　裕子

専門は先史生態学で、現生生態学の分析手法を用いて先史時代の生態系を復原していくとともに、人類の出現によって大きく変貌した現在の自然生態系を潜在生態系として再考することを研究主題にしている。具体的にはDNA分析による遺伝的解析・安定同位体等による食性分析等を行っている。

教授
服部　英雄

「あるき、み、ふれる歴史学」を実践中。官庁（文化庁）勤めが長く、全国の遺跡を見る機会に恵まれた。そのかたわら中世の荘園歩きも行ってきた。その成果は『景観にさぐる中世』（1995、新人物往来社）として刊行した。ひきつづき『地名の歴史学』（2000、角川叢書）を刊行した。今後『峠の歴史学』『史跡の歴史学』を出して、３部作にしたいと考えている。最近は歩くなかで考えてきた、しいたげられた人々の群像・歴史を明らかにしたいと思っている。

教授
矢田　　脩

蝶の自然史学とくに分類・形態・生物地理・生活史・保全に関する諸研究を行っている。おもに熱帯アジア地域の蝶を研究材料としてきたため、熱帯林の多様性の保護の視点から蝶の自然史学に取り組んでいる。一方、地域(福岡)の自然環境保全のための基礎データを得るため、蝶類を環境指標としたモニタリングの研究も進めつつある。

教授
中野　等

研究上の主たる関心は日本の中近世移行期、つまり戦国時代から江戸時代の前半くらいまでの政治・社会の動きを身分制の再編などを視野に入れつつ、統一的に把握することにあります。また、歴史叙述の基本となる史料についても構造的・多角的に議論を展開していきたいと「念願」しておりますが……。

助教授
宮崎　克則

研究内容
1）百姓一揆・打ちこわし・村芝居などを通した近世民衆史の研究
2）シーボルト・ケンペル等による「描かれたニッポン」の研究
3）歴史史料のデジタル活用、史料情報の横断検索システムについての研究
総合研究博物館の個人の URL
http://www.museum.kyushu-u.ac.jp/STAFF/miyazaki 2.html

助手
馬場　芳之

野生生物の遺伝子を調べることで、個体群変遷や遺伝的構造を研究主題としている。野生生物の中でも鳥類特にライチョウ類、イワヒバリなど比較的寒いところに生息する鳥類を用いて、個体群間の移入を中心とした生息状況の把握から保全までをおこなっている。

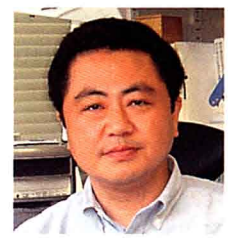
OSANAI Yasuhito

KOIKE Hiroko

HATTORI Hideo

YATA Osamu

NAKANO Hitoshi


MIYAZAKI Katsunori

BABA Yoshiyuki

自然保全情報講座

客員教授
米田　政明

人による野生動物管理の基本的理念・課題を求めつつ、生物多様性・生態系の生産性維持と人の諸活動調整の最適解を探る野生動物保護管理学に関わっている。“多くなりすぎる”シカやカモシカ、“少なすぎる”ヤマネコ類などの野生動物の生息状況の診断、変化予測の生物学的調査と、社会科学的分析も必要な保護管理対策を検討する研究分野である。この関連で2002年から、マレーシアで国立公園・保護区の生物調査と管理のあり方を調査している。

客員教授
松島　昇

人間の営みと自然環境とは相互に影響を与えあっている。私は世界各地の森林管理、熱帯林や少数民族の焼畑問題、乾燥地域での放牧と緑化の両立などをテーマとしてきた。現地で住民への直接的な聞取り調査が、自然の威力や人間の知恵などを解く鍵の一つである。途上国や先進国での、生物多様性など自然環境の具体的な保全技術、手法、政策が研究課題である。

客員助教授
菰田　誠

造林学、森林生態学を専攻。野生生物の国際取引に関する国際条約において、野生生物資源の持続可能な利用、国際協力、国内の管理体制などに注目してそのあり方を検討している。

YONEDA Masaaki

MATSUSHIMA Noboru

KOMODA Makoto

日本語教育講座

教授
松村　瑞子

社会言語学、対照言語学、特に意味・語用論を中心に研究を行っています。具体的には様々の言語事象に対して意味・語用論的な説明を与える研究、更に日本語と他言語の丁寧戦略の相違や男女差を社会言語学的な観点から分析しています。言語教育に役立つ言語学を目指しています。

教授
山村ひろみ

専門はスペイン語学。これまでスペイン語における時制体系のあり様を研究してきた。その結果、スペイン語の時制選択にあっては、各事態の理解において話し手が「変化」を認識するか否かが一つのポイントになる、ということが分かってきている。現在は、このようなスペイン語の時制体系のあり様を、スペイン語と系統を同じくする言語、また日本語のようにスペイン語とは系統も類型も異なる言語の時制体系と比較対照しながら言語と時間の関係を、人間がその環境をいかに認知していくのか、というより広い視点から考察している。

助教授
因　京子

日本語教育の方法開発、日本語の意味論・語用論の研究をしている。言語の用いられる場における意味や適切性とそれを支えるシステムの解明に関心がある。この数年は、レベルやスタイルなどの使い方の実態を分析する一方で、単純なルールでは捉えにくい日本語のコミュニケーションの特徴について学ぶための上級者用教材をマンガ作品を利用して開発している。また、研究留学生など、特定の目的を持った人々のための教材開発を行っている。

助教授
小山　悟

専門は第二言語習得論。学習者が日本語を習得していくプロセスとその心理的なメカニズムを明らかにすることによって、教育現場への応用を考えている。現在の主たる研究テーマは「文法要素の習得順序」。

助教授
西山　猛

専攻分野は日本語と中国語の対照研究。特に指示詞や人称代名詞の体系の研究。たとえば日本語の指示詞の体系は三系統で、これは韓国語と同じである。それに対して中国語や英語では二系統となっている。どうしてこのような違いがあるのか、またどうして同じ系統であっても実際の用例からみると様々な違いがあるのか、ということを調べている。また日本語や中国語の指示詞の系統が、歴史的に見てどのように変化してきたか、ということにも興味を持っている。

助教授
松永　典子

日本軍政下の東南アジア・戦時下の日本における日本語教育の教育理念・教育方法論の探求（アジアと日本との異文化交流・接触の歴史）、２）学術日本語表現及び異言語・異文化間コミュニケーションについての教育方法論研究。めざしているのは多文化・多様化の進む社会の「共生」のための研究教育。現在、国内及びマレーシア・北ボルネオをフィールドに聴き取りや調査等を行っている。

MATSUMURA Yoshiko

YAMAMURA Hiromi

CHINAMI Kyoko

KOYAMA Satoru

NISHIYAMA Takeshi

MATSUNAGA Noriko

アジア社会講座

教授
森川　哲雄

主な研究テーマは14－19世紀のモンゴルの社会、歴史についてですが、近年はこうした歴史研究の一つの材料となる、モンゴル人の手になるモンゴル年代記の研究を進めています。またモンゴルは歴史的に中国・中央アジアとも密接な関係にあり、その地域の歴史的状況、また現在の政治状況についても目を向けており、1987年以降、内蒙古、新彊ウイグル自治区、ウズベキスタン、カザフスタンなどに赴いてフィールド調査も行っている。

教授
清水　　展

専攻は、文化人類学。主な調査地はフィリピンおよび周辺地域。研究テーマは、１）先住民の民族・文化意識の先鋭化／政治・社会運動の展開／支援ネットワークのグローバル化のあいだの諸関係。２）海外に移住あるいは就労したフィリピン人の適応戦略、アイデンティティー再編、ナショナリティー。テーマ１）に関して、北部ルソン・イフガオの植林と文化復興の運動、２）に関して、マレーシア・サバ州（北ボルネオ）のキリスト教徒フィリピン人・コミュニティーで調査を続けています。

教授
太田　好信

専攻は文化人類学。私は、現代社会における文化の様態とそれを研究する文化人類学が直面している諸問題について考察している。そのような考察は、まず近代・西欧というある特定の「時間・場所」に編成された知として文化人類学を歴史化する視点によって開始する。しかし、歴史化することの目的は、現在から過去を裁くことではなく、新たな文化人類学の姿を語るためのスペースを構築することであるから、同時に文化人類学と隣接科学と境界を曖昧にしてゆく作業も行っている。

MORIKAWA Tetsuo

SHIMIZU Hiromu

OTA Yoshinobu

欧米社会講座

教授
高田　和夫

国際関係論や平和研究、ナショナリズム研究、ロシアの近代史と革命史研究などを通して、広くいえば「近代」が産み出したものが人間存在にとりいかなる作用をおよぼしたのかについて、なるべく広く考察することに現在もっとも関心をいだいています。

教授
古谷　嘉章

文化人類学専攻。博士（学術）（東京大学）。ラテンアメリカ（特にブラジル）でのフィールドワークを通して、「文化」理論の批判的検討、「近代」(modernity)についての理論の再構築、ブラジル・アマゾン・インディオについての言説の研究を行っている。

助教授
嶋田洋一郎

専門はドイツ文学およびドイツ社会文化思想史。主要な研究領域はドイツ啓蒙主義。現在特に関心を寄せているのは18世紀の思想家ヘルダーの主著『人類歴史哲学考』における歴史記述の問題や人類史における文化ならびに知の交流形態といった問題である。また当時の情報伝達の重要な手段であった翻訳の問題にも興味がある。

助教授
柄谷利恵子

国際関係論専攻。人の国際的移動の研究を通して、国際社会、国家、市民権の変容について考えています。これまでは、英国の例を中心に歴史的分析を行ってきました。現在は、英国における移民・市民権政策の研究を続けるとともに、①人の国際的移動と移民の権利に関する国際的レジームの萌芽的形成－国際機関の取り組み、②市民社会、人権、民主主義、安全保障といった基本概念の再考、③グローバル化時代の市民権のあり方についての研究を行っています。

TAKADA Kazuo

FURUYA Yoshiaki

SHIMADA Youichiro

KARATANI Rieko

比較文化講座

教授
高橋　憲一

中世と近代のヨーロッパ科学史を研究。ほぼ13～17世紀にわたるが、この時代を理解するにはギリシャやアラビアも射程に入れなくてはならない。ギリシャ語・アラビア語・ラテン語で原典テキストを地道に読んでいる。テキストと格闘してみたいと思う人は大歓迎。また科学とキリスト教の関係についても関心を寄せている。

教授
根井　　豊

デカルト哲学とそれが孕んでいる諸問題――知識、思惟と存在、心身問題 etc――の研究を中心にして、デカルトからカントに至る近代哲学の展開を考察している。それは単なる過去の思想史研究ではなく、現代から近代を見ることと、近代から現代を見ることを重ねることによって、現代の思想状況の立体図を描く試みでもある。

助教授
新島　龍美

プラトン、アリストテレスを中心とする古代ギリシア哲学に関する研究を行うと共に、そこでなされた思考が、こころの哲学や実践哲学等の様々な領域における現代の「哲学的諸問題」の考察にとっても極めて大きな魅力と可能性を持つものであることから、現代哲学にも関心を有している。

助教授
鏑木　政彦

専攻は政治思想史、ドイツ思想史。19世紀後半から20世紀初頭にかけての転換期ヨーロッパにおける思想を、主としてその政治思想的意味という観点から究明することを課題とし、これまではティリッヒ、ディルタイ、ニーチェを研究対象としてきた。最近は、これらの思想家から学んだ諸々の主題（歴史論、道徳論、権力論、解釈学、人間科学の方法論等）について、現在の議論を視野に入れつつ、歴史的のみならず理論的にも考察していきたいと考えている。

TAKAHASHI Ken'ichi

NEI Yutaka

NIIJIMA Tatsumi

KABURAGI Masahiko

比較政治講座

教授
大河原伸夫

通念的な「政治」を成り立たせている概念（や概念枠組み）の構造の批判的な検討を課題としています。特に「権力」や「影響力」といった概念に焦点をあてています。

助教授
岡崎　晴輝

2004年に九州大学に着任しました。法学研究院に所属し、大学院レベルでは、比較社会文化学府と法学府で教育活動に従事しています。研究者としては、市民自治という観点から政治理論を再編する仕事に取り組んでいます。私のホームページ（http://www1.ocn.ne.jp/~aktiv/）がありますので、ご笑覧ください。

OKAWARA Nobuo

OKAZAKI Seiki

異文化コミュニケーション講座

教授
MICHEL, Wolfgang

主な研究分野は欧日の言語文化交渉史。約450年前から今日に至るまでの間に来日したヨーロッパ人が日本の言語、文化、社会などをどう認識していたか、また彼らに対する日本人の反応はどうだったか、そしてまたヨーロッパ人の著書、旅行記、書簡、器物のコレクションなどがどのように受容されたかといった視点から、ヨーロッパ及び日本の資料を収集、分析し、欧日の相互認知、相互理解、あるいは誤解を生む歴史的背景やその特徴の解明に取り組んでいる。

この研究においては、テーマにより、医学薬学の東西交流の歴史、あるいはヨーロッパにおける日本研究の発展、西洋の用語の日本への浸透などが重要なポイントとなる。必要に応じて、東南アジアや中国も含めて分析する。詳しい情報はホームページを参照。

教授
井上奈良彦

コミュニケーション・言語・文化の関係に広く関心がある。最近の研究領域は、ディベートなどにおける議論の構造の分析、ディベートやスピーチの指導法、外国語教育のニーズ分析など。大学院の授業では他に、談話（会話）分析、コミュニケーションの民族誌、異文化コミュニケーション、社会言語学と語学教育、CMCなどを取り上げてきた。http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~inouen/参照。

教授
小谷　耕二

専門はアメリカ文学。とくにウィリアム・フォークナーを中心とした南部文芸復興期の文学、文化と思想に興味がある。現在の研究課題は、①南部アグレーリアンの「伝記」作品に関する研究、②黒人の自伝の系譜の研究、③現代アメリカ社会の多文化主義の系譜の研究、等である。いずれも、アメリカ社会内部での異文化間の交流や軋轢に関わる諸問題を考える糸口になるのではないかと考えている。

助教授
鈴木　敦典

文学作品を機械可読化したテキストデータベースの構築とその利用法に関する研究を行っている。インターネットの普及により、デジタルテキストの量は爆発的に増大しており、これらを対象とした言語分析の手法はますます重要になってくるであろう。今後はメディア論の立場から、従来の活字メディアと異なるデジタルテキストの独自性についても論じたいと考えている。語学教育・言語文化教育におけるネットワークの利用にも関心があり、本学府では、コンピュータリテラシーの基礎教育の他、UNIXを利用したテキスト処理等についての授業を行っている。

MICHEL, Wolfgang

INOUE Narahiko

KOTANI Koji

SUZUKI Atsunori

国際言語文化講座

教授
太田　一昭

研究課題は、16－17世紀イングランド演劇史である。現在以下の点について調査研究を行っている。(1)職業劇団の地方巡業活動。(2)演劇の検閲・統制。研究資料として特に注目しているのは、初期イングランド演劇関係記録（劇団の地方都市訪問記録、上演許可・上演料支払記録、公演禁止記録等）と演劇・出版統制関係布令である。併せて、この時代の演劇の中核を成すロンドンの演劇（シェイクスピアそのほか）についても再調査をしている。

教授
阿尾　安泰

18世紀フランス文学・思想、特に、ジャン＝ジャック・ルソーを主な研究対象とする。彼の作品の中でも、自伝的著作とされるものの分析に関心をもっている。またそこに現れる「個」と「全体」との関係を考える中で、フランス現代思想、とりわけフーコーの権力論に興味を抱くようになってきている。

教授
松原　孝俊

この数年、「現代韓国文化論」にも関心を広げ、「ナショナリズムと韓流文化」をテーマに、UCLAや北京大学・ソウル大学校などの研究者と共同研究を展開しています。国際言語文化講座では、院生諸君と共に、朝鮮半島を中心とした東アジア文化論を担当し、日本語を母語とする学習者のための韓国語教育、日本統治期朝鮮半島の民衆生活誌研究、あるいは古代から江戸時代に至る日韓文化交流史研究、さらには海外所在和本・朝鮮本古典籍データベース作成などの指導に従事しています。

助教授
秋吉　　收

研究分野は、魯迅を中心とした中国近現代文学、日中比較文学、台湾文学などで、また中国現代作家の文章の翻訳紹介などにも取り組んでいます。魯迅は、中国近代文学を代表する偉大な作家ですが、政治的な意味合いもありその評価はまだ完全なものとは言えません。最近私は、その魯迅が芥川龍之介の作品をこっそり(?!)模倣していた事実を発見し、学界から大きな反響を得ました。想像以上に強く「共振する」中国と日本を近代文学の視点から探求していきたいと考えています。

助教授
李　一清

1）社会政策分野：福祉国家論、社会保険政策（失業保険）分析、国際社会開発論。
2）政治学分野：発展国家論、政治体制変動論（発展途上国での民主化移行論）、国家主語とレジョナリズム（ナショナリズムと地域アイデンティティー）。
3）韓国学：韓国学諸分野。

OTA Kazuaki

AO Yasuyoshi

MATSUBARA Takatoshi

AKIYOSHI Shu

YI Ilcheong

地球自然環境講座

教授
嶌　洪

ヤドリバエ科という寄生性ハエ類の繁殖戦略や寄主選好性の進化、系統分類を研究している。近縁のハエ類との系統関係や寄生性の進化にも興味がある。日本昆虫相の起源についての考察も、具体的な材料を集めているところで、中国西南部やヒマラヤ地域の野外調査を継続している。蝶の系統進化や地理的分布についても関心がある。

教授
北　逸郎

地球深部流体の化学組成と同位体組成に基いて、地震・噴火現象およびマグマの起源や活動場に関する地球変動の研究とこれらに密接に関係する地熱や天然ガス資源の研究を行っている。また、プレートの沈み込み現象や地殻変動に伴って深部流体の起源物質となる深海底堆積物の中に記録された窒素や炭素の同位体比の変動による古環境変動の復元と大気汚染物質から現在の地球環境の研究にも取り組んでいる。

教授
酒井　治孝

堆積学、構造地質学、火山地質学などを専門とする野外地質学者。主にヒマラヤ山脈と日本列島を対象に、大陸の分裂・衝突や海洋プレートの沈み込みに起因する地殻変動や環境変動とそのメカニズムを解明することに取り組んでいる。ヒマラヤ山脈・チベット高原・南極氷床などの誕生と気候システムとの関係や日本海、四万十付加体の形成プロセスにも関心をもって研究に取り組んでいる。

助教授
石田　清隆

地球表層の岩石圏、すなわち地殻の構成物質の挙動に関する基礎的研究を行っている。地球表層の物質は、造山作用、変成作用、火山作用、風化浸食作用さらには生物作用による様々な変遷を記録して現在に至る。これらの記録を、鉱物化学や結晶学的手法で解析していく。

助教授
大野　正夫

岩石や堆積物の残留磁化を分析して過去の地球磁場の変動を求め、磁場の成因など、地球のダイナミクスの研究を行っている。グローバルな環境変動にも興味を持っている。また、地震・火山活動について、電磁場を観測して地下の構造を求めたり地殻活動をモニターする地球電磁気学の手法や、地下の水やガスなどの化学成分や同位体組成などを分析する地球化学の手法で研究している。

助教授
荒谷　邦雄

クワガタムシを題材に生物の進化の問題に取り組んでいる。この問題を追求するため、日本国内はもちろん世界各国に足をのばし、野外におけるクワガタムシの生態や行動を調査する一方、飼育による幼虫の栄養生理や生活史の解明、実験室内での形態比較、核型やDNA分析に至るまで幅広いアプローチを試みている。最終的にはクワガタムシそのものを歴史性をもった存在として総合的にとらえることを目的としている。

助教授
桑原　義博

地球表層部における岩石・鉱物と水との反応に関心を持ち、結晶の成長・溶解過程における鉱物の挙動を、結晶表面と内部の両方から原子レベルで追跡している。物質表面の凹凸情報を獲得できる原子間力顕微鏡を用いて、鉱物の表面構造緩和等の解明にも取り組んでいる。

助手
山中　寿朗

生物はその種ごとに固有の有機化合物を生成するが、その一部は死後も環境中に保存される。その様な有機化合物はバイオマーカーと呼ばれるが、岩石中や堆積物中のバイオマーカーを分析することによって過去～現在の生態系や環境の変化を明らかにする研究を行っている。バイオマーカー分析と共に安定同位体組成（炭素・窒素・硫黄）を用いることで生物の栄養源や、物質循環に関する評価も行っている。特に現在はこれらの手法を使ってアジアモンスーンの変動史の解明と深海底熱水噴出孔の地下といった高温高圧の環境に生物活動の痕跡を探り、生命誕生当時の環境と生物活動の関連を明らかにする研究に取り組んでいる。

助手
藤井　理恵

花粉分析学、古気候学、古環境学が専門である。過去100万年のインドモンスーンの変遷史を復元し、ヒマラヤ・チベット山塊の上昇のテクトニクスとの相互関係を明らかにする研究に取り組んでいる。主な研究対象地域は南アジア、特にヒマラヤ地域と西南日本である。

地球環境保全講座

教授
矢幡　久

森林や樹木が地球環境保全に果たす役割は大きい。この意義を明らかにし、同時に森林の保全や半乾燥地における環境造林の技術開発を目指し、光環境と樹木の成長、耐塩、耐乾性の解明、土壌等の生育環境改善など森林生態生理の研究に取り組んでいる。

助教授
黒澤　靖

専攻は地水環境保全学。アジアモンスーン地域を対象にしている。本地域では水田耕作に化学肥料が大量に投与されるが、化学肥料中の窒素成分は水中で人体に有害な形態の窒素に変化するため、水田やその周辺域では、地表水・地下水の水質汚染が起こる。また、山地部では人口圧のために斜面が農地として開発されるが、本地域斜面では土壌侵食がよく発生する。このような水質汚染や土壌侵食の発生について、諸要因の影響を明らかにする研究を行っている。

YAHATA Hisashi

SHIMA Hiroshi

KITA Itsuro

SAKAI Harutaka

KUROSAWA Kiyoshi

ISHIDA Kiyotaka

OHNO Masao

ARAYA Kunio

KUWAHARA Yoshihiro

YAMANAKA Toshiro

FUJII Rie

在籍学生数

修士課程

	M1	M2	合　計
日本社会文化専攻	31〔10〕	29〔12〕	60〔22〕
国際社会文化専攻	17〔 5〕	20〔 4〕	37〔 9〕
計	48〔15〕	49〔16〕	97〔31〕

博士課程

	D 1	D 2	D 3	合　計
日本社会文化専攻	28〔12〕	16〔 6〕	52〔18〕	96〔36〕
国際社会文化専攻	4〔 1〕	10〔 5〕	44〔 9〕	58〔15〕
計	32〔13〕	26〔11〕	96〔27〕	154〔51〕

研究生ほか

	研　究　生	科目等履修生
日本社会文化専攻	12〔 8〕	5〔 1〕
国際社会文化専攻	10〔 6〕	4〔 1〕
計	22〔14〕	9〔 2〕

〔　〕は、外国人留学生を内数で示す。

比較社会文化学府とその講座・教員の各ページは、下記のホームページに掲載されています

http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/F1/soshiki.html

発　行　者　　九州大学大学院
比較社会文化学府
発 行 年 月　　2006年 6 月

詳細については下記にご照会下さい。
〒810－8560　福岡市中央区六本松 4 － 2 － 1
九州大学大学院比較社会文化学府
TEL　092（726）4523・4524（大学院係）
FAX　092（726）4507　　（　〃　）
ホームページ：http://scs.kyushu-u.ac.jp/index-j.html

GRADUATE SCHOOL OF
SOCIAL AND CULTURAL STUDIES